
オールドロマンサー Old Romancer

木野目理兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オールドロマンサー Old Romancer

【Nコード】

N9925E

【作者名】

木野目理兵衛

【あらすじ】

記憶を失くした老人ハールは、超蒸気技術が生活の根幹を成す巨大地下都市イザヴェルにて、幼き妻イドゥナと共に平穏な日々を過ごしていた。だが、そんな彼の暮らしを脅かす影が視界をちらつき、やがてハールは世界に対する疑問を抱き始める。

1. 黄昏都市の一日

最初に得たのは孤独感で、次に覚えたのは喪失感だった。

世界に存在しているのは自分ただ独りだけなのではという漠然とした不安がまず襲い、その後から、何かとても重要な……それすら忘却の彼方であって、また曖昧なのだが……記憶を、自分は失くしてしまったのでは無いかという苦い想いが迫り来る。

そうして二つの負の感情が心臓と肺臓を頂点とする無数の内蔵を絞り込み、鈍く熱い苦痛によって浅い眠りから放り出されるのが、ハールの毎朝の情景であった。

無論、それは今朝も変わる事は無い。

寝具の上でゆっくりと上半身を起こし、聞き苦しい呼吸音を発しながら、額や頬に張り付く湿り気をその皺の多い手でゆっくりと拭いつつ、彼はカーテン越しに窓を見つめた。

コットン製の気色ばんだ白いカーテンの隙間と、煤で埃っぽく汚れた硝子を通して見える外は、煉瓦造りの屋根が原に煙突の森林、そこから登る排ガスと彼方此方より漂う蒸気の混合物たる薄い雲に覆われている、何処か退廃的な感を成す空、その幕を通して尚眼に痛い朱色の光を放っている擬似太陽、そして、巨大に構築されたそれすら見劣りする程高く、長く建てられた歯車仕掛けの管理塔という、何時も通りの光景である。

ここに来て九ヶ月と九日の間、全く変わる事の無いその姿に、同じく変化の無い心身の異常を落ち着かせて、ハールはふうと、深い息を零した。あの街並みは、現実として確かにあるものであり、故にこそ、形の無い胸騒ぎを抑えてくれる効果がある。尤も、彼の年老いた体には、この主だった都市機能を支えている蒸気機関の影響も、広大且つ完全であるとは言え閉鎖されているという事実に変わり無い都市自体の環境も決して良いものでは無かったが。或いはそうだからこそ、こう目覚める度に、言い様の無い憂いを覚えるの

かもしれない。もしそうであれば、実に皮肉であり、滑稽であると言わざるを得ないだろう。未だ生身のままの右眼は細まり、整えられた灰色の口髭の中で唇は吊り上がった。

「ん……あ、ハール……もう、朝になった、のかしら？」

その時、彼の背中越しに、聊か眠たげな、それでも可憐と捉えられる声上がる。

「ん……嗚呼、そうだよ、朝だ、イドウナ……どうやら起こしてしまった様だね、すまない。」

ハールはそれに応えようと、体を動かし、声の主の方へと向き直った。

狭い寝具の上、もう片方の際に、一人の少女が横たわっていた。豊かに波打つ小麦色の髪に、若草の様な色合いの瞳をした美しい娘であり、体を包み込む薄いシーツからはみ出た生白い細脚が、華奢な肩が、その外見をより好ましいものになっている。

「そんな事は……ん……無いわ、もう起きるべき頃合だし、それに丁度起きようかなって思っていた所だから……って、貴方、大丈夫？ 今日はまだ、何時にも増して汗塗れじゃない。」

イドウナは、そんな可愛らしい顔を欠伸によって聊か愛嬌のあるものへと転じさせた後、枕元に置かれた時計に眼をやり、それからハールの方を向いて、彼の状態に気が付くと、そっと体と腕を伸ばし、頬へと触れた。

彼女の白くて小さい、人形細工の如き華奢な手の感触に、老人は苦味の無い笑みを浮かべる。それはくすぐったくもまた心地の良いものであったし、同時にイドウナの、この身を慕ってくれている少女の優しさを、確かに感じさせてくれるものであるのだから。毎朝のこの不快さも、彼女という存在があれば、何という事も無く引いて行く。

ただ、その、代わりに、別のものが昂るのは如何ともし難い訳だが。

「まあ大丈夫ならいいんだけど……何、どうかした？」

ハールの言葉に安堵の吐息を吐き出して、彼と同じ様に滲み出た汗を拭ったイドゥナは、そこで漸く、彼の視線の方向が自身を向いていないという違和感に気付いた。

そうしてもう一つ、腕を伸ばした拍子に自分の体を覆っていたシャツが毀れ、小振りだけれどしっかりと均整の取れた、愛らしい形の良い乳房が露になっている事に。

はっとして、顔を赤らめると、イドゥナはいそいそとシーツを持ち、胸元を隠した。それから、ばつが悪そうに頬を掻いている老人へと、少女ははにかみながらに言う。

「もう……別に珍しいものでも無いじゃない。何でそんな反応するのよ。私達、夫婦なのに。」

「悪い、ね……どうも、まだ、余り慣れて無くて。」

彼女の反応に、ハールは更にぎこちなく頭を振った。確かに婚姻関係を結んでから数ヶ月、愛の営みに関しては幾度も行って来たけれど、だからと言って、それが普通になるという事でもあるまい。もっと時が経てばともあれ、今の状態ではどうしても、自分と彼女の年齢と、そして肉体の差に眼がいつてしまう。

実際今だって信じられない位なのだ、イドゥナと結婚したという事実。彼女の年齢が具体的に幾つかは解らないけれど、良くて十代半ば、下手をすれば前半にすら見える。その割に精神は成熟していて、しっかりとした基盤の上に立っている様に見えるけれど、だが、若々しくも美しい身を持っている事に変わりはないのだ。正確な数値は覚えてなどいないが、とうに五十を過ぎているだろう自分のそれとは比べくも無いのだから、ハールの動揺も頷けるだろう。

因みに、嫌味でも自慢でも何でも無い事をここに記しておく。

ハールがその様な思考に沈んでいると、イドゥナは体を起こして、寝具からそっと降りた。

彼女はローブの様にシーツを巻き付けたままに、扉を開けると、「ま、いいわ。珈琲淹れて来る……その事に関しては、また夜にじっくり、と。」

僅かに振り向き、猫の様な扇情的視線と微笑みを残して、すつと部屋から出て行った。

一人取り残されたハールは、やれやれとばかりに、腕を枕にして、ばふんと寝転ぶ。あれではどちらが年上か本当に解らないな、と、年季の入った天井の染みを見ながらぼんやり思った。

だが、何時までもそうゆっくりとはしていられない。再び窓の方を見れば、明らかに擬似太陽の角度は増していて、少なくとも今が早朝から朝になろうとしている事を、繊細な長針と短針の組み合わせよりも大胆に示し出している。

彼は視線を戻し、体を起こした。そうして、その産まれたままの姿をまずはどうにかするべく、寝具の側の小さな置物机に置かれた眼帯へと、手を伸ばした。

衣服を着込み、一階にある居間へと下りて、イドウナと一緒に珈琲と林檎だけの簡素な食事を口にしたハールは、少女が後片付けの後に服を着ている間に……先にそれをしてから事を成せと言っているにも関わらず、一向に治す気配が無いのが、この幼い妻の仕様が無い点だろうか……書斎へと至ると、自らの仕事場である、歯車式コンピュータ算譜機械が置かれた机の前に立った。

算譜機械の脇にある小さな起動レバーを上げれば、合成樹脂製の黒いパイプラインから供給される蒸気を動力源として、真鍮製の箱型本体の内部から、幾千幾万にも及ぶだろう歯車が廻り出し、絡み合う音が、ハールの耳へと届く。

そうして完全に立ち上がるまでの間、壁際にぎっしりと、際限無く頓着無く無数の本が集められた本棚が並ぶ一角で、ハールはまるで書物から靈感を搾り出す様に、或いはたった一つしか無い天窓から降り注ぐ一条の淡い光から神託を受け取る如く、ぐっと瞳を瞑っていた。

暫くの時が経った後、本体とは別に設置された木の額縁を持つ表示装置モニタの白い背景へ、壮大な鐘の音色に閉ざされた扉の意匠化され

た絵と共に、セピア色のイタリック体が『二十世紀ドアーズへようこそ、ガングレリ』という文字を刻み込む。

二十世紀ドアーズという名前や扉の絵の意味、恐らくこの算譜機械の前の所有者だったのだろうガングレリなる人物の事は全く解らなかつたけれど、それが起動完了のメッセージである事だけは、ハールも解っていた。

その文字が消え、白い初期開始画面が表示されたのを確認すると、彼は手元に置かれた有線式示唆記号操作器具、通称『二十日鼠』を動かした。画面上を飛び行く矢印を筆記算譜である『文字』の記号標識上へと持つて来て、素早く点打する。

歯車が幾分か余計に音と熱と震えを発する内、装置の中では無限に広がり行く紙が浮かび上がると、その先頭へと矢印を動かして指示枠を出して、ハールはマウスの横で幾つもの文字並べている黄銅色の打刻鍵盤に手を置き、徐に文章を打刻し始めた。

その指の動きは、見た目に背き、淀み無く、無駄が無い。彼は盤上をちらりとも見ずに画面のみを向いて、装置上の白亜の紙を、瞬く間に黒々とした文章の列で埋めて行く。

この一連の作業によって、ちよつとした読み物を書き記し、新聞社へ届け出る事こそが、ハールの仕事であり、毎朝の日課であり、そしてただ一つ出来る事でもあった。

便宜上の誕生日とされたから良く覚えているその十月十六日、彼は己に対する記憶を失った状態で、この見覚えの無い家屋の一室にて眼を覚ました。

自分が何者なのか。何という名前なのか。何処で産まれて、何処から来たのか。

ハールはそんな、自身に関わるもの全てを覚えていなかったのだ。そして、彼の側には、一人の少女が居た。

イドウナと名乗った彼女は、何も知らぬハールに、一から様々な事を教えてくれた。

ここはイザヴェルという、『フィンブルヴェト剣と狼の大寒波』から逃れ得た者達が建てた循環型巨大地下都市であり、今居るのは自分の家である事。ハールはイザヴェルの地上にある外門の前に、倒れていた事。それを最初に見つけたのが都市を司る齒車式超大算譜塔ウルトラコンビュータ『恐ろしき神の愛馬シル』の管理者であるイドウナの兄ルドールバで、その縁により彼女の家に引き取られた事。

はつきり言って、ハールには一体何の事なのか、さっぱり解らなかった。

もとい行き成りフィンブルヴェトやらウルトラコンピュータやらユグドラシルやら言われて、即座に理解出来る様な人間など居る訳が無いだろう。

「嗚呼いいのよ別に、解らなくたって。正直、私達も良く解っていないのだから。」

そんな風に頭を抱えて困惑するハールに対し、イドウナはそっと彼を抱き込むと、

「でも悩まなくていいわ、別に。良ければずっとここにいていいのだから。何か思い出すか、安心して暮らせる様になるまで、私が面倒見てあげる。」

母が子を、姉が弟をあやす様に、優しく諭してくれたものだ。

その行為によって、どれ程安心し、またそれからの生活の中でどれだけ世話になったか、ハールにとってはとても推し量れるものではない。兄のお古だと言って着るものもくれたし、眠る場所もあつらえてくれた。食事も、簡素だが、しっかりとしたものを三食頂いていた。無い記憶を記録で埋め合わせるべく、数多の書物を持って来てくれたのだ。

それから『片目の男』という意味の名を与えたのも、イドウナである。名前を付けられ、由来を聞く時まで、自身の左眼がただの孔になっている事すらハールは気が付かなかったのだが。

そうやって何もかも頂いた申し訳無さの中、彼が唯一見出したのが、この執筆であった。

それは正しく、見出した、と言って良いだろう。この家に住む様になってから数日後、書齋へと案内されたハールは、雑務の為に置かれていた算譜機械を一目見た瞬間に起動レバーを上げると、『文字』を呼び出し、一つの掌編を綴っていたのである。

筐体の中に納まった、眩暈が起きる程の数の歯車とその他の極小要素を持って計算するその機械の事は、彼も覚えていた。だが、それで自分が何を出来るのかまでは解っていなかった。

故にこそ、そうして出来上がったものに酷く驚いたのであるが、
「まあハール、これ貴方が書いたの？ ……凄いじゃない、立派な作品だわっ。」

「いや…：勝手に弄ってしまつてすまない。ただ指が勝手に、」
「ううん、構わないわ、いい兆候よ、記憶を思い出す為のね。きつと貴方前は作家だったのよ。いいえ、そうに違いないわ。もっと書いて見なさいよ、それで食べて行ける筈だから。」

それ以上に、イドウナの反応が、くすぐったくも嬉しかった。少々大袈裟では、とも感じたが、彼女の笑顔は、素直に快いと思えるものであったのだ。

かくしてハールは、イドウナの家のただの食客では無くなった。
都市唯一の新聞屋『ストウルルの息子^{ソン}』が配達している『詩篇^{エッダ}』にある種の読み物を書く契約が執り行われ、一日の半分を今の様に執筆作業へと費やしているのである。

その為に、またイドウナの手助けが要ったのは、心苦しい事ではあったけれど。

イドウナ、と、あの頃を思い返し、ハールは苦い笑みを浮かべた。確かに、彼女は自分に良くしてくれた。自分もまた、それに応えようと、自分もまた、くたびれた脳味噌を奮い起こし、拙い文章を綴っていた。

それが月日を経て、好意から愛情に変わっていったのは、すこぶる当然の事だったろう。

問題だったのは、彼の感情が、異性、恋人に対するそれであった事である。

余りに美しい姿に宿った朗らかな心。成る程、それに惹かれるのは、男として、同じく当然の事だったに違いあるまい。その視線が、自身へと向いていたならば、尚更の事だ。

しかし、記憶は無くとも感覚はある。自分が生物として種族を残して行くには、もしくは、人として恋愛を真に愉しむには、余りに老いている事を、ハールは良く解っていたのだ。

だからこそ自分は、忘れている以外にも何処か脳の中におかしな所があるに違いない、と思ったものだが、事は案外と上手く行った。イドウナの方もまたハールへと心惹き付けられていて、その二人の愛に、彼女の兄含む周囲が実に好意的だったのだから。

それから後に、婚姻として、この都市にて崇められている女神ヴァールの前にて彼等は夫婦となったのだが、今でもハールは信じ難い思いの中にある。

その事は先に少し書いたが、改めて上げる事はやぶさかで無い。本当に、余りにも全てが上手く行過ぎている様な気がしてならぬのだ。まるで見えざる運命の歯車があり、その回転によって自分が滞りなく動いているかの様に。それは、イドウナの存在によって日中は忘れ去っている孤独感や喪失感というものとはまた違う不安定さだった。

けれど、同時に、心配し過ぎなのでは、とも思っている。予想外に事が進んでいる事に対して、心が均衡を保とうとしているのでは無いのか、ともだ。

まあつまりそれだけイドウナは良い妻という訳か、と、聞く者が居れば苦笑するか激怒するかかの二択である台詞を心の内で呟きつつ、恐るべき速度によって打刻していたハールは、ふと、表情装置の脇に置かれた置時計の二つの針が、一つの数字を刺そうとしているのに気が付いた。

気が付けば、とうの昔に朝では無くなり、昼も昼、正午となって

いた。

極度の精神的集中は時間を縮めるというが、これもまた少しばかり極端だろうか。ハールは一層苦味を込めて笑みを浮かべると、二十日鼠を操作。現在の文章を階差機構に保存し、それから算譜機械シャットダウンを遮断した。

今日は戦神テュールの日、即ち火曜日だ。原稿の提出は麗しの女神フレイヤを示す金曜日だから、まだ時間はある。同時に、一度途切れた集中を再び紡ぐのは難しいのだ。

それから昼食はちゃんとイドウナと取りたいし、午後からは彼女との出かける約束がある。

とりあえず今日はこれまで、と打刻鍵盤から手を離すと、ハールはほとんど、つま先を打ち鳴らし、足首を廻す。元からとはいえ、椅子を設置しないのはある種の意地であるし、立っている事は神経の糸を一本昂らせる効果を生み出すが、やはり脚には応えるものだ。この疲労を、今からはしっかりと癒しておきたいものだ。そう彼は考えると、向きを変え、歯車の騒音も消えて静かになった書斎を、一人後にして行くのだった。

食堂へとやって来たハールは、殆ど間を置く事無く差し出されたイドウナの手料理に舌鼓を打った。内実は、ジャガイモをすり潰して牛乳、バターと一緒に合わせたものに、じっくりと茹で上げられた分厚い白ソーセージ、そして度数の軽い麦酒である。多量であれば体に毒であるこの飲み物も、適量であれば妙薬となるのだ。

朝を軽く済ませた分、昼はそれなりにしっかりと取ったハールは、短い小休止を送った後で、その愛する妻と共に、外へと出掛けて行った。

その地下都市イザヴェルは、大別して八つの区画に分けられている。

都市中央に位置し、正しくは中枢として機能している塔。ユグその周

辺、巨大階差機構に風を送って冷却する為の深い奈落。それを囲い込む壁一枚隔て、丸く円を描きながらに広がり各種施設、商店街、住宅地、職人街が続く、赤煉瓦造りの外周を抜ければ農耕地へと出る。更にそのまま真っ直ぐ行くと、最終的には海、海水を溜め込んだ水堀へと至れるだろう。最深部で数千メートル、水際から擬似太陽Ⅱ大照明装置が巡る天蓋、即ち地の果てまで何十キロもある様なものを、果たして水堀と呼べるとするならば、だが。

ともあれ、こうして解る様に、イザヴェルは塔を中心に広がる円環都市である。その周辺環境もまた、イザヴェルの一つとするならば、都市というよりも国家、いや世界と述べた方がより適切だろう。かつてイドウナがハールへと説明する時、この地を循環型と称したのはそう言う訳である。この都市は完全に、内部で完結しているのだ。

それに対して、ハールは全く違和感を覚えないから、きっとこの時代には普遍的なものであると思われる。少なくとも、その技術水準としては。

そんな彼、というよりもイドウナの家は、商店街から程近い住宅地の一角にあった。似た様な家々が密集し、複雑な小路が成されているそこから彼等が向かうのは、大通りの方だ。

大通りは縦横に二本、中央目指して十字を描く様に伸びている。尤も、その交差点には塔があるし、更にその周りには奈落が穿たれているから正確な形を象ってはいない。塔への入場は限られているから道も途中で途切れてしまっている。だから都市の反対側に行くには偉い大回りをする必要があったけれど、隣の区画へ行く位ならば、やはりここを通るのが一番早かった。

同時に、大通りならば辻馬車が拾える。蒸気仕掛けの、馬だけで無い獣を模した機械によって引かれるそれは、最も手頃且つ身近な乗り物だった。

が、ハールはどうもそいつらが気に入らなかった。自分達と同じ

様な遊歩道者が至る所に闊歩し、その間を、白い煙を噴出しながら、金属細工の骨組みで構築された狼やら豚やら猫やらが、白い煙を吐きつつ客車を背負って過ぎて行くけれど、彼は一瞥もせずに歩く。

その隣に行くイドウナは、伺う様にその首根っこをハールの前面へと出して、

「ねえやっぱり乗らないの、辻馬車。お金だって掛からないし、時間だって掛からないわ。それに今日は午後から雨が降るかもって、ヴェズルの天気予報で言っていたわよ。」

彼女の言葉に、老人はやや気難しげに眉を潜めると、その視線を上へと見上げた。

確かに雲は今朝よりも厚くなっており、その色合いも黒味を増している様だ。

擬似太陽の出力変更、四季の変動こそ、塔の指揮下にあるが、天候自体は操作しようが無い。だから塔の出来る事は絶対には絶対にならない予知だけで、そういった塔の算譜結果を即座に読み取るのが、俗に『巫女』と言われる者の役目である。

高度に複雑化したとは言え、算譜機械の大元は、歯車の凹凸の噛み具合である。その単純でありながら余りに複雑怪奇な取り組みを、逐一人語に解釈するのは時間的に無理があり、しばしば組み合わせ自体が言語として読解される。その言語は『秘譜』^{ルーン}と呼ばれ、それを正確に読み取るには、多大な研鑽と、それ以上に才能を必要するのであるという。何処か抜けた性格が妙な人気を博しているあの能天気、失礼、お天気巫女^{キャスター}ヴェズルも、それなりの苦労人という事か。彼女の読解率が高くなければ、鼻で笑ってしまう様な事実であるけれど。

ただ、それをイドウナから聞いても、ハールは一向に辻馬車を留める気配が無い。今の季節は夏で、衣服の厚みも薄い。傘も持っていない訳で、時分に関係無く老体に雨は厳しいだろうに、彼は実に頑なな様子を保っていた。

「もう、仕方が無いわね。後で乗りたいって言っても、知らないん

だから。」

イドウナはそう言うのと、体を起こし、つんとして歩き出す。ただハールは、それが決して本気では無い事を知っているから、別段何も言わずに微笑むだけだ。もし仮に、彼が倒れる様な事でもあれば、強引にでも辻馬車に押し込み、医者イサナの所まで連れて行く。それが、イドウナという少女である事を、ハールは良く理解しているつもりだった。

しかし、自身の感覚に嘘は付けない。

彼女が何と言おうと、あの辻馬車というのはどうにも好きになれないのだ。

恐らくその原因は、あの動力部である模造動物にあるのだと思う。細い金属を編み込んだそれは、どう見ても機械であるのだけれど、しかし妙に生々しさを感じさせる。その逆行性が、ハールには耐え難いのだろう。嘘でありながらも嘘ではない、という事実は、記憶という地盤を持たぬ男にとっては、なかなか受け入れるものもあるまい。元になった筈の生き物が、この都市に、仮に農耕地であろうと一匹たりとも居ないという事実が、それに付随される。

そうして、ハールが耐え難いものと言え、もう一つ存在した。それは外に出ると、絶えず視界の隅をちらつく存在である。こうやって、イドウナと二人歩いている時でさえ、彼にはそれが気になつて仕方が無かった。

「なあイドウナ。」

「うん？ なあに、ハール。」

何時の間にか腕を組んで歩いている彼女へと、ハールは尋ねる。人垣の中、通りの曲がり角、小路への入り口、地下階段の陰などに佇む、その、黒いフード付きローブを纏った者達を。

「前にも聞いたな……矮人ドウェルグだったか、あれは一体何なんだ。」

そう言つて、彼は影の方へと焦点を合わせる。矮人と呼ばれる割にはそれ程小さいという訳でも無いその存在達は、直ぐにフードで隠れた顔を上げると、ハールの片目の視線から逃れる様に、こそこ

そと物陰へと消えていった。外見も不気味だが、その仕草も気味が悪い。

しかし、何よりも彼の心を煩わせたのは、

「え？ やあね、矮人は矮人よ。それ以上でもそれ以下でも無いわ。」

とイドウナが言う様に、この都市の者達が、あの存在を気にもしていないという事である。

始めて矮人を見た時も、ハールは彼女に訪ねたが、帰って来たのは今と似たり寄ったりなものだった。街の連中にも聞いて回ったけれど、返って来る言葉は大体同じである。図書館に赴き、調べた事もあったが、結果は同じだった。ただ、どうもあの者達は住人達より忌み嫌われていて、言葉の上でさえ触れぬ様されているらしい、という事位は解った。それで結局正体は、と聞かれても、応え様が無かったが。

だからこそ、余計に気になるのだ。矮人とは何者なのか、あのローブの下には、如何なる真実が隠されているのか。或いはその事実へ至れば、覚醒の度に自分を苛むもの、失われた記憶も取り戻せるのでは無いか。ハールはそう考えていた。

それを、今だ行っていないのは、胆力が不足しているからに他ならない。確かに、それをする事で新しいものが見えてくるかもしれない。だが、暗黙の了解を破ってまで果たしてやる意味があるのか、と言われると微妙である。何よりも、それによって、今のこの快い関係や環境が壊れてしまうのではという疑問こそが問題であった。

「ほらハール？ 付いたわよ、呆っとしない。」

そこでイドウナの声が耳元に飛び込み、彼ははっとなって前を見た。薄暗い思考の海に沈んでいる間に、辻を行く怪船に乗る事も無く、ハールは目的地へと付いてしまった様だ。

大通りに面する商店街の片隅に佇む、古びた木の味わいが素晴らしい一軒の喫茶店^{カフェ}。

九人もの娘を持つ赤ら顔の店主ルギエが営むその店こそが、午後の遊歩の目的地である。普段であれば午後のお茶など家で行うものだけれど、今日はここがいい、と言って来たのはイドウナだった。雰囲気も良く、旨い珈琲や菓子、言えば酒類も出すのだけれど、料金が少々お高く、財布に厳しいのが難点で、常連にはちよつとなれない。精々が、こうして時折暇を見てくるのが関の山という所だろう。それでも良いから、とイドウナは言う。彼女は、ここで出されるアップルパイが好きなのだ。自分で作るのでも、この店のものには適わないのだと。どちらも何度か食した事があるハールにしてみれば、然程差は無かった様に感じられるけれど、そこにはまたイドウナなりのこだわりめいたものがあるに違いない。

そう思いつつ、ハールはそつと扉を開けた。感覚の奥深くから到来する女性第一の精神を持って、期待に胸膨らます彼女の方を先へと誘わせる。

その時、運良くと言うべきか、運悪くと言うべきか、丁度向こうから現れる者が居た。

「おっと？ これはこれは、また奇遇ですな、ハール殿、それからイドウナ殿。」

それはまた奇遇にも見知った顔であった、が、彼等には余り喜ばしい者では無かった。

眉間に皺を寄せ、嫌悪感も露にさせながら、イドウナは言う。

扉の脇に立ってその道を塞いでいる、黒髪の青年へと向けて。

「ロプト……貴方、こんな所で油売って、何やってるのよ。仕事はどうしたの？」

「また心外なお言葉ですなあルドールバ閣下の妹君、まるで私が無碍にして無為に時間を潰しているかの様に仰られる。私とて、これでも忙しい日々を追われる哀れな者に過ぎないのです。その隙間に出来る僅かな休息を、芳しきルギエの珈琲で送ったっていいではありませんか。」

そのイドウナの言葉に対し、実に丁寧な物腰で、しかし無礼な心

持をその薄ら笑いに込めながら、ロプトと呼ばれた青年は、やれやれという調子で肩を竦めた。

「して、そうは思いませんかな？ 閣下の義弟殿。」

彼の台詞にイドウナがむっと陰悪な表情を見せる中、ロプトは続け様にハールの方へと声を掛けた。老人は、青年の調子に聊かうんざりした様子で、片眉を上げながらに応える。

「嗚呼、確かにその通りだ。だが、それは我々として同じなのだよ、ロプト。」

「おお、これは失礼を。」

ロプトは、ハールの言葉に芝居がかった驚きを見せると、さっと扉から離れた。

「夫婦水入らずの一時に、とんだ邪魔を入れてしまった様ですな、申し訳無い。」

本当にそう思っているのだろうか。そこは実に疑わしかったけれど、ハールは首を縦に振り、

「いや、別に構わんよ、こちらとしてはね。」

「然様で。それでは、また何れお逢いしましょう、灰髭の男。」
ハールバルズ

ロプトは紅い瞳を片方瞑ると、飛び跳ねる様に通りの向こうへと歩いて行った。

「……義兄も大変だな、あの様な男が部下であるとは。」

ハールはその口髭を撫で付けて、去って行く青年の後姿を見送る。若々しく、そして逞しいあの男の弟とは良くぞ言ってくれたものだと、その皺が入った瞳が語っていた。

「全くよ、嫌味な男だわっ。あんな奴とこんな所で出くわすなんて。」

イドウナは憎悪にも似た不快感を如実に表情へと浮かべ、抗議の声を高らかに発した。

ロプトは、彼女の兄の側近とも呼べる立場にある人物だ。
塔の総合的な管理を行っているルドールバは、その役職に相応し

い、公正公明な好漢であり、イドウナと結婚する以前、知り合った当時から、ハールは良い印象を持っていた。

が、後に彼から紹介されたあの男は、それと間逆の性質を持つ男であり、自然、ハールも好ましい感情を抱く事が出来なかった。それは今も続き、払拭しきれずに居る。あの絶えず人を小馬鹿にしている様な、ちよつとした世間話の時に置いても垣間見せる道化の如き態度は、どうしようも無く接する者を不愉快にさせるのだ。

その感想はイドウナも同じであった様で、彼女の口から語られるロプトは、実に酷いものである。実の兄が、あんな男と接する事自体、許せずにいるらしい。

実際、ハールも不思議だった。何故ルドールバは、ロプトの様な者を側に置いているのか。

同じにイドウナの態度も、だ。人間性の生理的嫌悪だとか、家族に対しての想いだとか、そういったものはまた別の理由で、彼女は彼を嫌っている節がある。それが何なのかは、やはりハールには判別付かないものであったけれど。

ともあれ、そんな男に対して時間を割いても致し方が無い。気を取り直した二人は、改めて、ルギエの店へと入る。

いらっしやいませ、という計十一人分の声が、木の床を踏み鳴らすと共に響き渡った。

外から見るとこじんまりとした様に見える店内は中に入ってみると、それなりに広い様に感じられる。先客が結構な数居るに関わらず、だ。実際にそうやって建てられているのか、或いは暗褐色の落ち着いた照明やきつちりと整えられた間取り、カウンターので譜刻^{レコ}盤を元に、年代物な楽曲^{クラシカル}を流している歯車式蓄音機^{フオングラフ}が心的な余裕を与えているのかは定かで無いけれど、悪くは無かった。寧ろ良好と言って差し支えあるまい。

多少なりとも荒んでいた心が癒えて行くのを感じつつ、ハールとイドウナは、ルギエの何番目かの娘である女給に誘われるかの様に

して、奥のテーブル席へと向かった。店の内装に合致した卓と椅子に来て、静かに腰を下ろす二人は、直ぐに注文を命じる。

「水を一杯、それから熱い珈琲を頂けるだろうか。」

「私もお水、それからアップルティーと、アップルパイをお願いするわね。」

その言葉に、畏まりましたと会釈すると、女給は踵を返して、カウンターへと戻って行った。

さて、一度注文してしまうと、品が届くまでの間が暇なものである。

ハールは再び立ち上がり、テーブルの間を通ると、盗難防止用の施錠が成された今週号の新聞を一つ……他にも幾束かあるけれど、それらは全て週を置いた詩篇である……掴み上げ、元来た道をイドウナの元へと帰って行った。

「何か面白い記事でも見つけたの？」

「うん……うん、ちょっと待ってくれ——」

そんなにでも無いけれどちょっとは興味あるし聞かせてくれるならば聞いてもいいわ、という猫の視線を送る彼女に対し、ハールは椅子に座ると、ばさりと黄褐色のインクで擦られた紙を広げ、犬の如き鋭敏且つ実直な集中力を元に、文字へと目を通して行く。

と言っても、目ばしいものは余り無かった。

この都市はなかなか平和で、余り事件らしい事件というのが起きない。だから掲載されている内容も、何処其処の誰々さんが何々の事を成し遂げた（例…著名な職人が多数住んでいる事で知られるニダヴェリール通りD十二番地のブロクル氏が、中空にて七色に変色する花火の製造に成功した、等）という様な、身近のちょっとした出来事が大半である。

ここの者達は、都市という場所に関わらず、穏やかな気性の持ち主ばかりであるらしい。とても良い事であると思う。勿論中にはロプトの様な人間も居る訳なのだが。

因みに記事の残りは公私問わずの告知文に連載小説、そして最後

に、事件事故という按配だ。

そうしてハールは、個人販売用猪型辻馬車『タンダリスニ』の発注募集広告や、自分が恥ずかしげも無く記した作品を苦笑気味にちらと見つ、一枚捲り、酒樽を載せた辻馬車が誤って荷を崩し、ぶちまけた液体によって阿漕な酔っ払いどもの舌を愉しめたという、漸く現れた『らしい』事件に笑いながら、ふと一つの告知文を見つけて視線を止めた。

一頁使って、今までの例に漏れぬ日常的なコメントを載せていた記事なのだが、その中の一つが、妙に彼の琴線を刺激したのである。それは僅か一行の簡潔な文で、この様なものだった。

『物事の真偽を見極めたくば大樹にて首を括れ。ただし、頭は下にしてするべし。』

セックからサンゲタルへ

別に大したものでも無いし、周りと浮いている訳でも無い一文である。こうした何処か謎めいた、詩的なものや格言めいたものは他にも幾らでも載っているのだ。

だが、それでもハールは妙に気になった。何かこれは重要な事が書かれているのでは無いか。セックやサンゲタルと言った聞き覚えの無い……あのガングレリと同じだ……名前にも、隠れた意味を感じる。その感覚が、齒の奥に何か挟まった様にむず痒かった。

ただ、これも何時もと同じで、何の根拠も無いものである。

「ハール？ ハールっ？」

そうイドウナに己が名を呼ばれて、ハールは漸く我に返った。

「あ、嗚呼何だ？ イドウナ。」

「何だじゃないわよ、呆っとして。疲れてるの？ 前見てみなさいよ、前。」

言われるがままに視線を向けると、何時の間にか頼んでいた品が

現れていた。凝り性なグラスとカップにそれぞれ入った水と珈琲が、
老人の顔をその水面に映し出している。

「何時の間に……。」

「ついさっきだわ。気付いてなかったのね、やっぱり。」

「全然、だ。」

「やれやれだわ、ねっ。」

イドウナは額に手をやって頭を振った。

が、直ぐに腕を伸ばすと、彼女はハールの手の中から詩篇を奪い取ってみせる。正に、あつと言う間の出来事で、成す術も無く新聞を取られた彼を尻目に、イドウナは自身の膝の上に新聞を載せてから、きゅうと目を細めて伺う様に、

「もう、男の人は放って置くと直ぐそうやって新聞なんか夢中になるんだから。別に構いませんけどね？　まずは目の前に居るご婦人の相手をしてくれなくちゃ困るわよ。」

そう言ってみせるけれど、唇は笑みを浮かべていて、口振りも優しいものだった。

「成る程、確かにそれは尤もな話だ。」

ハールもまた微笑むと、大仰な仕草を持って、肩を竦める。

「解ればいいのよ解れば。」

イドウナはそう応えようと、前に置かれているルギエ特製のアップルパイにフォークを入れた。甘酸っぱい芳香が卓の対岸に居るハールすら鼻腔を擦るそれを食べ易い様小さく切り分け、平に乗せてそつと薄紅色の唇へと運べば、てゆっくりと、微細な成分まで味わう様に口を動かす。

そうして灯った頬の赤らみに、緩んだ目と頬の柔らかさは、婦人というよりも年齢通りの少女であったが、これはこれでまた眼福である、ハールは幼いその妻を見つつ珈琲を啜った。

幾分きつい値段も、その笑顔を見られるならば安いものだ、と思うながら。

暫くぶりに好物を味わった幸福にすっかり浸っているイドウナを微笑ましくもそつと誘って、ハールはルギエの店から表へと出た。気が付くと、外は既に暗くなっている。どうやらヴェズルの予報は外れたらしく、雲は流れて確かな空を見る事が出来た。擬似太陽もまた外壁の向こうへ姿を消そうとしており、代わって天蓋上には、太陽よりも幾分か小さく、青い光を放っている擬似満月が昇ろうとしている所である。更に周囲を見れば、家路を急ぐ人々の姿が至る所で目に付く。その中には幾つか、あの忌まわしき矮人の姿もあったけれど、霧が包み込む様なこの雰囲気の前には些細な存在だ。

確かにゆったりと、間延びした時間を過ごしたが、どうもそれは予想以上に長いものだったらしい。実に夕方の空気を放っているイザヴェルの風景に笑みを浮かべつつに、ハールは歩き出した。イドウナがその隣を、やや早足で付いて行く。

「やっぱりあそこのは美味しいわ。あの真っ赤な色彩も素敵だし。」
「嗚呼それは結構……私も、一切れ貰って置けば良かったな。」

そう言うって笑う彼女が自身微笑ましく、ハールは応えながらに、そつと金の髪を撫ぜた。

イドウナは、僅かに眼を細めてくぐすつたそうにした後、徐にその手を弾き、

「やあねハール。私は、あなたの子供じゃないのよ。」

勿論孫でもね、と更に猫のそれが如く口元を吊り上げ、彼の左手をぎゅつと握った。

「私は貴方の妻なんだからね？ 何度も言ってるけど、それを忘れちゃ困るわ。」

暖かで、柔らかな、小さな感触が、その全てと対極を成す自身の掌より伝わる。

「ん……強引だな。いや、勿論、忘れてなどいないさ。」

ハールはイドウナの言葉にそう返すと、ぎゅつと握り返した。

二人の様子を傍目から見たならば、先程彼女が危惧した通りの関係だと思われた事だろう。確かにその事は、彼自身半ばそう感じて

いるのだから、他人の思考を否定出来る訳も無い。

だがしかし、ハールのもう半分は、そんな事など最早気にしていなかった。

「全く……忘れる事など誰が出来るか。」

眩き、イドウナを見つめるハールに、彼女もまた、にこやかに微笑んで見せる。その表情の愛おしさに、老人は歓喜の思いが胸一杯に満ち溢れてくるのを感じた。

全く、何と幸福な事だろうか。記憶も無く、ついでに片目も無く、それでいて歳月は無慈悲に刻まれた男。そんなハールにとって、この少女の存在が、どれ程までに心の拠り所となっている事か、彼にもそれは計り知れないものである。

だからこそ、と、ハールはその指に一層の力を込めた。だからこそ、この手を離してはならないのだ。イドウナという愛すべき妻を、その妻と送るこの幸せな日々の連続を、決して、何があろうとも、手放してはならない。ちょっと痛いわよ、と、怒った様に、しかし口元へ笑みを湛えて言うイドウナに謝りつつも、ハールの心は揺ぎ無かった。

そうして二人は、周囲の者達がそうする様に、ゆったりと家路を進んで行く。

月光と、幾つも並ぶ瓦斯灯の輝き、窓辺から毀れる家々の明かりに、導かれる様にして。

2. RとFの正午線

そこでハールは、自分が見知らぬ土地を歩いている事に気が付いた。

はてと訝しがって立ち止まると、目に入るのは一面の黒世界である。

遙か彼方に望める地平線まで、人口の建造物はおろか、自然の造形物すら皆無の平坦な荒野へと、イザヴェルよりも濃い黄褐色の雲か黒い雪が降り積もり、大地を覆っているのだ。

一步踏み込めばぐじゅりという湿った音がし、脚を上げようとしてもその黒い雪は灰の様に靴に引っ付いて剥がれない。靴だけでなく、触れた服にすらそれはこびり付いて行く。

その様子に、何とも言い難い嫌悪感が浮かんだけれど、ハールは再び歩き出した。

おかしい話で、ここが何処なのか皆目検討も付かないというのに、行かねばならないという気だけがしている。それこそ何処に、何故に、と疑うべき所だろうけれど、彼の中で進まねばならないという感覚は異様に強く強迫めいたものとなっており、容易に覆せはしない。

ハールはそうやって歩き続けた。老いたる心と体に苦痛以外の何物でも無い、この一切の慰を欠いた地平を、延々と、見えざる声に従うかの様にして。

いや、正確に言うならば、声ではなく視線だろうか。見えざる瞳が自分を見ている、それも四方と言わず彼方此方から見ているのを、ハールは感じていた。それも絶えず。周囲には彼以外居らず、隠れる様な場所とて無いのだというのに、これは一体何だと言うのか。

だがそう思った所で、返って来るのは物言わぬ観察者の気配でしかない。半ば諦めの気持ちのままに、ハールは脚を動かし続けた。

黒雪に点々と足跡を残し、見果てぬ果てを目指して。

その景色は何時までも変わる事は無かったけれど、時間を経るに、一つの変化が起こった。何時までも止む事無い黒い雪の中から、唐突に、聞き覚えのある二つの声だけが上がったのだ。

全く仕方が無いわねこの人は、と言う少女の声は、紛れも無くイドウナのもの。それに対し、作業に徹した後なのだから構わないさ、と応える男のそれは、ルドールバのものだ。

ハールは再度立ち止まった。ここが何処で、何処へ向かっているのかは解らないけれど、何処から来たか、思い出す。ついでに、今が何時なのであるかも。

今日は金曜日、女神フレイヤの日であり、彼の執筆を掲載している新聞屋『ストウルルの息子^{ソン}』から編集担当のヨーン氏が原稿を取りに来る日であった。午前がもう直ぐ終わろうとする頃に自宅を訪れた彼の人は、ハールが打刻^{タイク}した原稿を読むと、その出来に太鼓判を押し、更に機会が無いからと今夜上映される映画^{キントロープ}の鑑賞券を二枚くれたのだ。そうして、ほんの僅かな間だけれども労苦からの開放と、降って湧いた享楽への期待を胸に、イドウナが作る昼食と食後に珈琲へと舌鼓打った彼は、今日遊びに来る予定の義兄が訪れるまでの間、居間の安楽椅子で休んでいたのだが、何時しか意識が解けて行き――

思わず自分が寝入ってしまった事をハールが悟った瞬間、夢はたちどころに消えた。

呻きつつ、生の右目を擦りながら体を起こすと、木製の卓の前に、イドウナとルドールバが座っていた。二人とも珈琲カップを手に、何事か話していた様だが、彼が起きたのに気付くと、妹は呆れた様な笑みを、その兄はそれを嗜めるかの如き笑みを浮かべて、口々に言う。

「漸く起きたみたいね、お寝坊さん。今日ルドが来るって知ってたように、全くもう。」

「お早うハール……はは、私なら構わないよイドウナ。特に用があるという訳でも無いからね。」

「と……すいません義兄さん。どうも、うっかりしていた様で。」
兄妹で実によく似た二人の若者の姿に微笑みつつ、ハールはよつと立ち上がった。拍子に肩へと掛かっていたシャツが崩れ落ちるのに更に笑みを深めつつ、彼はイドウナの隣へ赴いた。ありがとう、とその耳に囁いてやると、イドウナはふふつと鼻で笑ってから、気にしないで私達夫婦じゃない、と応える。そうやって平気な風にカップへと珈琲を注いで行くが、ハールは彼女の頬に薄っすら赤味が指している事を見逃さなかった。

振り向けば、ルドールバが二人の様子を愉しげに見つめている。そのイドウナと同じ色の瞳とふと重なり、無性な気恥ずかしさを覚えたハールは、苦笑いしつつ肩をすくめた。そうして、聊か荒々しげに置かれたカップを口元へ寄せつつ、彼は己の義理の兄を改めて見る。

ルドールバは、イドウナよりもずっと年の入った青年だ。年齢からすると二十代後半か、三十台に入るか否か、という所である。その年の差もあって、イドウナが産まれて直ぐに死去してしまった両親に代わり彼女を育てたと聞いている。だからどちらかというところ兄というよりも父という側面がイドウナにとっては強い様だが、老人たるハールからすると、異様に若い父親という風に感ぜられた。確かに見た目はイドウナと良く似ていながら相応の年に達しているのだが、何処か詩人を思わす儂げな印象の為か、もつとずっと若々しく見受けられるのだ。尤も、当人に詩の才能などからつきしであったのだが。

そんな相手に敬語で接するというのも、ハールにとってはまたおかしい話であるが、やはり関係上は妻の兄になる訳であり、そこはしっかりして置きたいという感覚もある。

イドウナが淹れてくれた珈琲を味わう様にじつくりと啜り、香り高い暖かさが全身に満ちるのを感じながら、ハールはそう、ルドール

ルバを思った。先に見た、あの意味不明の夢を頭から追い出す様に。今日の朝も当然の如く見た、あの寝起きの不快さは無かったけれど、これだって決して気持ちが良いという訳ではない。

「ともあれ、元気そうで何よりだよハール。執筆業は色々大変みたいだが。」

それを察して、という訳では勿論無いのだろうけれど、実の妹が淹れた珈琲を啜りながらに言う義兄の言葉が喜ばしく、ハールは笑った。そうですね、と頷けば、

「そちらこそですね。久方ぶりに顔を見ましたが……職務の方は、恙無く？」

「嗚呼勿論、と言いたいがね。承諾の為だけに何時間も拘束されるのは勘弁願いたい。」

ルドールバは、さも嫌そうに頭を振う。そこでハールは更に笑った。義兄は都市の中核である歯車式超大算譜塔『ウルトラコンピュータ恐ろしき神の愛馬』の管理者であるのだが、しかしその管理の仕事は大したものでは無いらしい。主な行程は塔ユグが行う為、彼の役割は各種計算機構使用の認可が一番大きいと聞いている。例えば天気の予報など、あのサイズの歯車式算譜機械で無ければ出来ないのだという。そういった塔の利用を求めて、うず高く積み上げられた書類に印を押すのが自分の役目だと彼はかつて言ったが、成る程、それは重要とは言え、退屈な役目であるに違いない。もし自分がその様な事をする羽目になれば、一日と言わずに、嫌気が差してしまうだろう。

そこで男同士解る事があるのか、ハールとルドールバが笑い合っている、皮を剥いて食べ易い様に切り終えた林檎を持って来たイドウナが、つんと鼻柱を上げた様子で言った。

「何言ってるのよ、その仕事に就く為にこの家を出て行った癖に。今更泣き言も無いんだわ。」

彼女はそう、フォークで刺した白い果肉をしゃりしゃりと噛み砕いて行く。

ルドールバは、ハールを一瞥した後、苦味を帯びた笑みを浮かべ

て、

「まあ……確かにそうなのだが、多少とも愚痴を零してもいいじゃないか、イドウナ。それに、君にはハールがいるだろう？それとも、夫婦仲に問題があるのかな、君達。」

「いや……まさか、そんな事は無い、かと。」

「まさかっ。もしそうだったら、とつくにこの家から追い出して貰わっ。」

その言葉への返答は、夫妻ほぼ同時だったけれど、明らかに妻の方が相手を圧倒する。更にイドウナは、ぎよっとした表情を浮かべるハールの片腕へと抱き着いてみせた。

「これはまた……我が妹ながらに、妬くべきなのか？」

「はあ、そうするべき、所なのかもしれないなあ。」

彼等の様子をじっと眺めながら、先程の笑みをより深めるルドⅡルバへと視線を送りながら、ハールもまた彼と同じ笑みを浮かべるが、しかし、その幼い妻の行為を咎めようとはしなかった。イドウナの豊かな金髪が肌に触れる柔らかい感触、華奢な腕に込められた力強さ、立ち上る何処か林檎めいた芳香、それが示す愛情を、この若者の前で独り占めするのも悪くは無い、と、少々意地は悪いが、しかし純粹な喜びが、その胸を包み込んでいた。

そうやって暫くの間、三人は、何と言う事も無い世間話に花を咲かせていた。例えば、タナクヴィスル通りにあるニエルドの定職屋が出す魚料理は、なかなか美味だ、とかだ。

それは実に、ハールの心を愉快にさせた。大した事では決して無いのけれども、いやだからこそ、今ここで生きている事の幸福を実感出来るというものだ。先に見た夢が、まだ心にしこりとして残っている以上は、尚更に。

「嗚呼、そうだハール。少し良いかな？」

そして、珈琲を入れておいたポットが空になり、つまみとして出されたい林檎が全て無くなった頃、イドウナが片付けに席を立った

後で、ルドールバは幾分真剣な面持ちで言った。

一体行き成り何だとハールは思ったけれど、だが首肯した。ありがとうと義兄が礼を言いつつ、外へと出て行くのに訝しがりつつも、彼は後を付いて行く。廊下を抜け、二重扉を開けて出ると、小路を抜ける風が頬に当たって、ハールはむっと顔を顰めた。

その前で、ルドールバは、この家々の影からでも容易に見据える事が出来る塔と、背後に延々と続くかの如く黄昏色の空を眺めていたが、ふと振り向いて言った。

「話というのは他でも無い、ロプトの事だ。先日は、彼が失礼を働いた様だね。」

何事かと身構えていたハールは、その名を聞いて、嗚呼、と合点がいった。成る程あいつの事だったかと、表情が崩れ、彼は気にするな、と頭に置いてからにこう返す。

「イドウナか、本人から聞いたのでしようけれど、大したものでも無いですよ。私自身、今になるまですっかり忘れていた位なのですからな。」

その言葉に、ルドールバは何か安心した様で、ふっと口元を吊り上げながらに、

「ならばいいのだが……あれは、余り出来が宜しくない。何か妙な事を言うかもしれないが、今の様にそうやって流してくれると、私としても気は楽だな。」

それを聞いて、ハールは笑った。やはりあの様な部下を持つと、上司というのも大変なのだろう。彼が、余り塔の仕事を好んでいない風なのは、そこにも原因があるのかもしれない。

「大変ですなあ、義兄さんも。同情します。」

その様な境遇に陥る様な仕事についていないハールは、半ば対岸の火事として言った。ルドールバは、それに対し、口元だけでなく眉間も幾分か吊り上げて、

「全く……時折、お前と私の役柄を交換したくなる時があるよ、本当に。」

「いいですよ、構いません。ただ、そちらとは別の苦しみが待っておりますが。」

「解っているさ、そんな事。それに、私が文の才能を持たない事など、とうに知っていよう？」

「勿論ですとも。イドウナから一度見せられましたが、確かにあれは酷かった。」

年の離れた義理の兄弟は、互いの欠点を挙げた後に、盛大に笑い合うのだった。

「ではまた暇な時にでも伺おう、そんな余裕があるとするならば、だが。」

そして擬似太陽が傾き始める頃、ルドールバは帰って行った。特注の白馬型辻馬車である『フリングホルニ』が路地まで入り、彼を乗せて去って行くのを、ハールとイドウナが見送る。

その後ろ姿が見えなくなると、さて、と彼女は夫の方を向いて、「それじゃ、私達もそろそろ準備をしましょうか。結構遠いから、辻馬車に乗るわよ。」

「嗚呼、まあ仕方が無い……やはり出来れば他がいいのだが、な。」くすくすと声を出して笑うイドウナに、ハールはどうしようも無いといった笑みで返した。

彼等はこれから、各種公共施設が備わった中心部へと、幻画を見に行く予定だった。

幻画とは、一種の映像投射装置であり、元来動力源として使われる蒸気を媒体として、そこへ光を放ち、三次元的な立体映像を中空に浮かび上がらせるという機械及びその映像である。

なかなか面白い趣向なのだが、しかしハールはまだ一度も見た事が無かった。

何故と言って、一回の入場料が恐ろしく高価であり、また新作公開が断続的だからである。

これは、その機構上の問題に由来する。立体的に映す為には、四方八方から光線を放つ必要があるのだが、その光線、映像を撮って来るのに、複数の転写装置カメラがまた必須となる。一つの存在を、別の角度から幾つも捉えなければならぬのだ。だから当然、一回の撮影だけでも相当な時間や費用がかさむ訳であり、比例して入場料も上がり、使い廻しも増えるという寸法だ。

ただそれでも、市民の娯楽としてやって行ける程の利益が出ているのは、その高価さが逆に珍奇なものであるとして、別の人気を産んでいるからだろう。

イドウナが招待券を貰った時の喜び様も、これに起因していた風を感じられる。事実、内容云々よりも見られるというその事実こそ、嬉しがっていたのだから。ただ、それはそれでハールとしては微笑ましい事である。それにまた、自分も見てみたかったのだから、丁度いい。

部屋へと戻ったハールは、一足先に夜会用のきちんとした黒のスーツ一式に着替え、髭を剃る等の身支度を終えると、イドウナが着替えて来るのを、居間で待っていた。一々この様な格好にならなければならぬのは甚だ面倒臭い風俗であるけれど、それに難無く準じている自分もまた居る。それから暫く時が経ち、そと取り出した真鍮製懐中時計の文字盤が、パタパタと秒盤を廻し、二つの時盤が『18』と刻んだ時、お待たせ、とイドウナが居間へとやって来た。彼女の格好は、青を基調にしてフリルを多用した絹のドレスであり、名も知らぬ白い造花を丁寧につけた小麦色の髪の毛に挿して飾りと成していた。成る程、こういう普段と違う格好が見られるというのならば、この習慣もまたいいかと思いつつ、ハールが良く似合っていると褒めると、イドウナは少女らしいはにかんだ表情で、ありがとうと告げた。

そのまま二人は連れ立って、外へと出た。準備している間に、擬似太陽はすっかりと沈み込み、擬似満月と瓦斯灯、家々の明かりが

周囲を薄青く照らしている。

健やかな夜の光景が辺りに満ちる中、彼等は小路から大通りへ行くべく、連れ立って歩いた。小さな淑女が彼女よりも高い紳士の片腕に組み付く輪郭が、石畳を進んで行く。もし、その影に色があるならば、紳士の顔は赤らんでいた事だろう。昼間は断固として拒否しているこの挙動も、夜ともなれば許しているものだが、それでも恥ずかしい事には違いない。それと同じか、或いは以上の事を成しているのでは、という言葉は、紙一重の感触で消火されている。

擦れ違う人の少ない、だが決して無い訳では無い細い道を行くと、その形容詞が、少なくない、へと転じる広々とした道に出た。ハールが空いている手でそっと手を上げると、折り良く通り掛かった辻馬車が止まり、二人を乗せて走り始める。

向かうのは、塔が位置する中心部だ。奈落の外側に並ぶ各種施設郡の多くは、地下或いは専用的高速辻馬車によるメッセンジャーを介し、塔と繋がっている。計算気候を利用するが為であり、隣接地域に建設されているのもその為だ。噴出される蒸気へと適切な間隔、位置を持って光線を放射、三次元映像を浮かび上がらせるには、それなりの計算が必要となるのだ。

その幻画を公演している劇場目指し、ハール達を乗せた辻馬車は真っ直ぐ向かって行く。体内の貯蔵槽に圧縮した蒸気を調整された一定量の元に吐き出し、闊歩して走るその鉄の獣は、何を思っただか蛇の頭に馬の体をした奇怪な姿をしており、その偽物じみた生き物によって引かれる彼の嫌悪感を強めた。腕を組んで肩を怒らせる老人の隣に座る少女は、その様子にクスクスと笑い声を上げる。ハール自身、これではどちらが子供かと思っているけれど、だが嫌いなものは嫌いなのである。その態度を容易に改められるものでも無い。こうして二人を乗せた辻馬車は大通りを中へ中へと進んだ。小さな窓の向こうに移る建築物が、煉瓦と木造の家から硝子と装飾の多い店へと変わり、やがて大規模な建物へと変わる。イザヴェルを分ける厳格な区切りは実は無い……特に、外壁内部に置いては……の

だが、それでも解る程に景色は変化し、そうして目的地である劇場へとやって来た。

ハール達と同じ様な格好をした者達が何人か、連れ立って降りて行く地下への階段、その入り口の上に毒々しいまでに派手な色彩を放つ発光塗料で『フニットビョルグ座』と書かれた看板がある。階段を少し下りると、その両壁には確かに『幻画』と銘打たれると共に、奇々怪々な怪物や、ハンサムな俳優達が描かれたポスターが貼ってあった。

「さ、それじゃ行きましようかハール。そんなむつりした顔は止めて頂戴ね？折角の幻画なんですから、もつとずっと愉しみましようよ。」

その性質から幻画は、活動的なもの、娯楽的なものが、より好まれる傾向にある。

「ん……嗚呼、そうだな。それでは、そうするとしよう。」

組んだ腕を強引に引つ張り崩す妻に苦笑いを浮かべながら、ハールはそつと先に辻馬車から下りた。自然と、吐息が毀れる。正直、余り生きた心地はしなかったのだ。それから、恭しげにイドウナの片手を取りつつ、そつと大地へ立たせてやる。とんと、編み込み靴を鳴らしつつ、床に脚を付けた彼女は、再び彼の片腕を取ると、その柔らかな髪の毛を押し付けた。

ハールが先導する形で、二人は階段を下りて行く。とは言え、実際の長さは対してある訳でも無く、緩やかに下降するそれを数段踏めば、大仰な造りの木製の開き扉が目の前に現れた。その両隣に佇んでいる、ポスターの中の人物と似た様な印象を与える若い、だが異様に背の高い給仕達によって扉が開かれ、ハールとイドウナはさつと中へと入った。

半地下にあるフニットビョルグ座のホールは、狭い入口とは裏腹に結構な広さを持っていた。正面に位置する太い支柱を中心に円の形をしており、幾つかの廊下がそこから伸びている。その奥に見える、この入り口と同じ造りの扉が、恐らく幻画を上映する舞台へと

続いているのだろう。人々はホールに大挙している。彼等は扉が開かれるのを待って、支柱の下に造られた売店より新聞や案内書、簡易容器ごとの飲食物を購入し、談笑に明け暮れている様だった。

片目だけでざっと見たハールは、お客様、と告げた声の方を見た。入口より一段高く、相応の歳月を隔てたカウンターを挟んで、給仕が一人立っている。片眼鏡を付け、細く伸ばした口髭をしており、しっかりと糊付けがされた身形をしている事と相俟って、外に居た者達よりも位が上である事を感じさせる人物だ。ただし背丈は彼等と大差なかったが。

揉み手をする彼の側には、一台の切符管理機械キャッシュレジスタが置かれている。真鍮と木で形作られたそれはカチコチと静かに歯車を噛み合わせる音を立ており、ふと見ると、意匠化された扉の絵が小さく刻まれていた。二十日鼠マウスは無く、打刻鍵盤タイプボードも数字と僅かな記号だけの簡素なものだが、これも歯車式算譜機械、『二十世紀ドアーズ』の一つなのだ。

ハールがそう観察していると、給仕はにこやかな調子で、お客様入場券はお持ちでしょうか、と告げてきた。そこで彼の役割が何であるかを把握すると、嗚呼、と老人は頷き、空いている方の手で懷を漁り、ヨーン氏から頂いた樹脂製のそれを差し出す。

ありがとうございます、と給仕は慇懃に受け取ると、さっとそれを管理機械の脇に刻まれた切れ目スリットに入れ、素早く通した。風を切る様な鋭い音と共に、大きく歯車が回転する音が響き、ほんの数秒の間だが、給仕はじっと真剣な面持ちで機械を……ハールの側からは良く見えないけれど、表示装置モニタが付いているのだろう……片眼鏡越しにじっと見つめる。

と、不意にその表情が崩れ、彼はありがとうございますとご入場結構です、と告げた。同時に、断続的な機械音が響いて、切れ目の上部に設置された排出口から、ガッガッガッと、丸まり気味の小さな紙片が弾き出された。さっと手渡されたそれを見ると、今より30分程後の日時と共に、『3』という数字が刻まれている。それが

舞台の番号を示す事は、成る程、伸び行く廊下の先が扉にそれぞれ数字が割り振られている事からして明白だった。これが再度の入場券となる事も、その扉の前に居る給仕の存在が告げている。

イドウナ用の二枚目も、同様の所作を持って紙片を受け取り、二人は無事に中へと入った。或いは彼女の方が少し時間的感覚が短かった気もするけれど、そこは性差と美貌という点に寄り、笑って不問にするでしょう。

そうしてハールとイドウナはホールへと脚を踏み入れた。その床には、赤いウールの絨毯が敷き詰められており、靴底を通して柔らかく返す弾力が心地良い。

が、何時までもそんな事に意識を送っていられる筈も無く、問題は時間の方にあった。

余裕を持って早くに到着する様、辻馬車を寄越したのは自分達であるのだが、だが三十分も余るとは想定していなかった。この三十分というのは、短い様で意外に長く、それでいて事を成すにはやはり足りないという、何とも中途半端な時間である。

さてどうしようかと、ハールは辺りを見渡した。売店があるから、そこで案内書でも買って、ソファに座り暇を潰すか、或いは知っている顔でも探す事にしようか。余り外に出ないものだから、こういう時世間話が出来る相手には困ってしまうのだけれど。

「おやおや、この様な場所で再び逢えるとは、運命の偶然と呼ぶべきなのではないかな？」

そして、その様な時に逢う人間とは、往々にして逢いたくない人間である事が多い。唐突に声を掛けられ、その方を向いた二人は、そこに佇む人物に、それぞれ顔を顰めた。日常の中の些細なハレの時に、逢いたいと思う様な人物では無かったのだから。

「ロプト……また、偶然だな。お前がこんな所に居るとは思わなかった。」

「……何であんたがこんな所に居るの、いやらしい。ちゃんと券を見せて入ったんでしょね。」

対比するとその反応は、当然の様にイドウナの方が激しいものだったか。しかし対峙する方は、正装に身を包んで尚隠す事の出来ないある種の不快さを笑みに込めて応えた。

「ははは、私は『空気』の様なものですからな、居ると思える場所でしたら、大抵居ると思って構わないでしょう。と、言いつつネタ晴らしをさせて頂けるならば、この支配人は、私の古い友人でしてね、どうして懇意にさせて貰っているのですよ……蜂蜜酒を貰おうか。」

彼の言動は、どうも場の雰囲気には酔っているのか、幾分慇懃無礼さが増していた。ロプトは、ハールのどうしようかという怪訝な視線、イドウナのはっきりと嫌悪を含んだ目線をさらりと受け流しながら、売店へ歩み寄ると、そう売り子へ告げつつに、先のカウンターの給仕へとウィンクした。どうやらマスターであるらしい男は、少し困った風な笑顔を向けつつも、売り子へ首を縦に振り、どうしようかと困惑げな表情を浮かべる彼女は、取り繕った笑顔の元で、樹脂製の容器に入れられたこの劇場の隠れた名物という蜂蜜酒をロプトに差し出した。かの男は金を支払っていないのだが、それが自然と、挨拶一つして夫婦の元へと戻って来る。

その様な真似は、と、さも旨そうに黄金色の液体を飲み干す男をハールは咎めようとしたが、しかしあえて言葉には出さなかった。自分達とて、概要は似たようなものであるのだから。

「はん、とんだ乞食^{ルンペン}ね。ここの支配人も、たまったものでは無いでしょうに、全く。」

ただ、イドウナの方は感情を抑える事が出来ないのか、はっきりと声に出して告げた。ハールはぎょっとし、その所作を止めようとした手を伸ばしたが、それよりも先にロプトが動いた。

「まあ、私が何をしようとするそれは私の勝手だ、実にどうでも宜しい所で、ちらりと見ましたが、貴方方は第三舞台場の様だけれど、そこで催される幻画を知っていますかな、イドウナ殿。」

或いはもう忘れておられるかもしれませんがね、と続けて言う男

に、イドウナは怒らした肩と顔はそのままに、さっと紙片を取り出した。そうして改めて、そこに刻まれた文字を読み込んで行く間に、彼女の顔は明らかに変化した。即ち、赤から青へと、だ。おやと怪しがり、促される様にしてハールも改めて紙片を見たが、特に変わった様子は無い。ただ『3』という数字以外に、主演の名前だろう『イヤールク』と、こちらはタイトルだろうか、『黎明への黄泉路』という文字が、細かい表記の中で僅かに太く刻まれている程度である。

「お気づきに成られた様で。久しぶりの幻画だったから、見落とされてましたかな？」

「……？ どうした、イドウナ。一体、何があるというんだ。」

せせら笑うロプトの前で、ぶるぶると全身を震わすイドウナを、ハールは心配そうに覗き込んだ。この少女が、こんな表情をするのを見たのは、実際始めてであるのだ。

暫くの間彼女はまるで耳が聞こえていないかの様に震動しているだけだったが、唐突に顔を上げると、その夫の腕を引っ掴んで、こう言い放った。

「出ましようハール。ここを出るのよ、さあ早くにつ。」

「な、何を言い出すんだい、イドウナ、行き成り。」

突然の変化にハールは驚き、ぐっと踏み止まった。老いてはいても、成人した男性と成人前の少女では勝敗など端から決まっているが、だがそれでも彼女はその手を離そうとせず、ぐいぐいと引っ張って、彼を劇場から出そうとする。

妻の豹変に、夫は困惑した。一体これはどういう事なのかと。ちらりと周囲に片目を向ければ、同じ様に何事かとこちらを伺う群衆の中に何時の間にか混じって、ロプトが嘲笑めいた笑みを浮かべながらに、イドウナを見下ろしている。

曖昧なままだった感情が、ここで一方へ傾き、ハールの心情を固めた。彼はそっと彼女の腕を放させると、膝を曲げて同じ目線へと立ち、微笑みながらに告げる。

「嗚呼解ったよイドウナ。何故かは聞かないけれど、ここを出るでしょう。」

そうして、ほっとした様な表情をするイドウナの手を取ると、彼は足早に出口へと向けて歩き出した。あの支配人がおろおろとした様子で、払い戻しがどうのこうのと言うのも無視し、一直線に外へと出て行く。ふと視線が気になり、僅かに後ろを見れば、黒髪赤眼の青年が、両の腕を広げて、芝居がかった体勢のまま、微笑みを浮かべて彼等を見送っているのだった。

「……ごめんなさい、ハール。あんな無茶な事を言い出してしまつて。」

フニットビョルグ座が少し歩いた地点、ちょっとした公園へとやって来た二人は、昂った神経を休ませるべく、ベンチに座り、休憩を噛み締めていた。

「いや、気にしないでくれ、イドウナ。そもそも、あの男が悪いのだから。」

隣に座り、その体を丸々と投げ出しているイドウナの、何時にも増して小さく感じられる体を抱いて、ハールは言った。節くれだつた手は優しく彼女の金の髪を撫でているが、その声には刺々しいものがある。彼の頭の中では、昼間義兄とだけ話した言葉がありありと浮かんでいたのだ。成る程、確かに、あの男の言う事、いや存在そのものを真に受けてはならない。記憶が乏しい故か、滅多に反感を覚えぬハールであっても、あれは酷いと感じさせてくれる。

だがその言葉にイドウナは、体を起こしつつ、いいえと頭を振った。

「ロプトのせいじゃないわ。あいつは関係無い……悪いのは私だから、それこそ気にしないで。」

そう言いつつ彼女は、頭に乗せられていた彼の手をそっと掴むと、その恋人の片目を見据え、

「ねえハール、お願いよ。ここでキスして頂戴。」

その言葉は、ハールにとって、今までにも増して衝撃の大きなものだった。

「イドウナ……ここで、かね？」

公園は、決して広いものではない。今だ夜も更けていない時間ならば、充分に人通りもあり、また同時に彼等が居るのは、街灯の光が落ちる木製が長椅子の上なのだ。事実、側を歩く通行人がちらりとこちらを見て、何事か言いながら去って行くのが感じられる。傍目には、親子と思われるのだろうか、或いはもっと酷い様に考えられているのだろうか。

「そんなの関係無いわ、ねえお願いよハール。私達、夫婦じゃないの？」

だが、イドウナはその様な外聞などまるで御構い無しだった。ぎゅうと更にもう片方の手を加えるがままに、顔を、唇を近づける仕草に、ハールの心臓も高鳴って行く。夫婦、そうた、確かに、自分達は夫婦なのだ。婚姻の女神ヴァールの前にて、その愛を誓い合った、

「それとも、貴方は……私の事を、愛して無いというの？」

彼の想いはそう昂り、胸を脈打つ確かな苦痛として実体を徐々に露にしていたのだが、イドウナが涙と共に発したその言葉によって、くだらない恥辱を捨てさせ、一気に行動を促した。

イドウナ、と、その愛すべき妻の名を呟きながら、ハールは唇を近付けた。そっと濡れた瞳を瞑らせ、顔を上げたイドウナの唇がそれと重なり、二人は街灯の下で一つとなった。ハールはそこに、柔らかく、何処か林檎を思わせる甘い味を感じて、年甲斐も無く情欲に燃える自分を覚えた。寝具の上でならばそれも良いだろうけれどしかしこんな場所では、或いは、傍目にはどれ程グロテスクに見えるのか、などと言う常識的な思考を悉く燃やし尽くす本能の焰だ。それが彼の中で踊りのたうつ舌として顕現し、美しき乙女の応えによって更に勢いを増させた。

二人が漸く離れたのは、唇を交わしてから実に数分後の事であり、

その間、僅かに鼻からのみ必要な酸素を取っていた彼等は、汗だくとなったパートナーを見やって、ふっと笑い合った。

そうして夫は妻に、妻は夫に、そつと耳打ちをした。冷え冷えとした男の一人や二人現れようと、決して変わる事が無い、熱い想いを、端的な、一つの言葉に乗せて。

「……そろそろ帰ろうか、イドウナ。」

「……ええ、そうねハール、私達の家に。」

その後、語られた言葉の中には、言外のもが含まれており、彼等は更に微笑みを深めた。彼等は手と手を取り合い、瞳と瞳を交わしながら、辻馬車を拾うべく、大通りの方へと向かった。火照った体に夜風は涼しく、歩いて帰っても良い気分ではあったけれど、しかし距離的にはそれは無謀であるし、今は何よりも時間が惜しかった。

そうして早足に向かっていたが為だろう、ハールはどんと、すれ違ふ人に肩をぶつけた。

「と……いや、失礼。大丈夫でした、」

か、と言おうとして、今度は彼の方が、ぴきりと凍り付いた。相手側は、ただ少し肩を払っただけで何事も無く歩み去って行くのだけれど、しかしハールはその場から動く事が出来ない。

「もう危ないわねえ……ハール？　ねえ、どうかしたの。」

浮ついた頭でただぶかったという認識しかしていなかったのだろうか、イドウナは頬を膨らませ、次にハールの変化を訝しがったが、その当人はやはり何も言えなかった。

人間的愛情に満たされていたが故に、彼の思考は咄嗟にその存在へ対処する事が出来ず、算譜機械が遮断する様に、その場で停止してしまつたのである。

これは怪我の功名というべきなのか。

或いは、何処かの誰かが言った様に、運命の偶然と称すべきなのか。

そのどちらかかは定かではないが、ともあれハールは見てしまっ

ただ。それが抱いていた、今まではすっかりと忘れていた疑問の
答えを、欲しくも無い時に、唐突な形で。彼が今触れた相手は、あ
の矮人^{ドウェルグ}であり、そうしてぶつかり合った拍子に、その中身を覗いて
しまった。フードをすっぽり被ったローブの下で鈍く輝くそれは機
械仕掛けの動物達と同じの……

3. 黎明への黄泉路

もう冬であるかの様な肌寒い風が灰褐色の空より吹き荒び、外海に大波を上げさせる中で、小型受音機ラジオからは明るい背景音楽と共に今日の天気に移り変わりが告げられていた。

巫女ヴェズルが、その性格を如実に現した声色で語る予報は、眼前に広がる光景とは不釣り合いであったが、しかし内容は、その風景をこそ指し示している。

その格差に考える所はあるけれども、しかしハールは表情一つ変えず、足元に転がる岩々へと波をぶつけ、濃密な飛沫を上げている薄暗い巨大な水堀をじっと見つめていた。

そう、ここは外堀なのだ。どれ程の深遠を讃えていようと、果てが見えない遥かまで広がっていようと、これは人の手によって創られた海だ。それを言うならば、地下都市そのものが人工の地である。海だけでなく、空も、大地も、だ。そしてその事実、また巧妙に装飾され、画されている。ハール自身、この海を本物と言われているれば、信じてしまったかもしれない。

問題なのは、事実を何処から言われ、何処までが言われていないのかだ。或いは虚偽を。その判断を、記憶を失った老人が行うのは不可能と言って良いだろう。彼が立つ地盤を築いたのは、全て与えられたものであるのだから。故に、彼の心は目覚めの度に、言い知れない感覚を覚え、今のこの幸福の裏に潜むものを考えてしまうに違いない。

無論、普段であれば、これまでであれば、気の所為と捉えて、無視していた事だろう。

だが、今のハールにそれは到底出来かねるというものである。

数日前、劇場からの夜道で、彼は矮人ドウェルグの中身を見てしまったのだ。あの、金属細工の骨で組まれた機械の姿を。誰もが触れようとせず、何も語らぬ存在の真実を。

なまじ片鱗しか垣間見る事が出来なかった為だろう、その瞬間より、ハールの中で曖昧なままに終わっていた疑問が全て噴出し始めた。彼は、早々に自身の仕事に切りを付けると、彼方此方へ赴いては、かつて聞いた質問を見知った者達へと問うた。即ち、矮人とは何なのか、と。そしてついでは何だが、あの『剣と狼の大寒波』^{ヴェト}についても。

そうして返って来る言葉は、往々にして前と変わらぬものだった。言葉は違うがそれは往々にして三種類、即ち「知らない」「知ってどうする?」「知らなくても良い」である。

半ば予想していたとは言え、その返答にハールは表情を曇らせた。更に彼は、もし住人達の知らないという言葉信じらるなら、彼等も自分と同じ様に何も解っていないという事実^{事実}に気付き、それでも尚平然と暮らせている市民達を訝しがった。

続いて彼は、図書館へも赴いた。ハールとイドウナの家から丁度反対側に位置するその施設は、端末として置かれた歯車式算譜機械^{コンピュータ}で調べなければ、何処に何があるのか誰も解らない程に膨大な書物と資料を保存している。かつて同じ理由で赴いた事があり、その時は目ぼしいものは無かったけれど、もしかしたら今度こそは、と、ハールは、あの矮人との会合以来、ますます嫌悪感を募らせる様になった辻馬車に乗って、そこへと向かった。

しかしながら、一度行って成し遂げられなかった事を、二度目で必ず出来るというものではない。いや寧ろそうで無い事の方が多いだろう。表示装置^{モニタ}に浮かぶ目録の上で指示枠組^{カーソル}を動かし、点打^{クリック}と打刻^{タイ}を幾度も行って、ハールは自分に有益な知識を得んと欲したが、しかしその努力に関わらず、知り得た事は皆無だった。司書として一切を管理しているというリンロオンの三姉妹にも話は聞いたが、彼女達は一様に首を横に振るうばかりである。あまつさえ姉妹達は、去り行こうとするハールへところ言ったものだ。解を求めれば解の方からやって来るものだ真実^{サズ}の者よ、と。その真実とやらを押し量れないが故に、彼女達の元を訪れたハールとしては、返す言葉も無

く苦笑するより他無かったが。

そうして、釈然としない思いのままに、彼は今ここに居る。偽りとは言え、波寄せるこの海を見ていれば、少しは心晴れるかとして赴いたのだが、しかし疑いは依然そのままだ。

寧ろ、ヴェズルが予報し、的中した天候の様に、それは勢いを増させて行く。天を覆い尽くす厚い雲の層が遂に耐え切れず雫となつて降り注げば、海は荒れ始め、ハールの体を濡らし始めた。それは間違い無く老体を蝕むものであるうけれど、だが彼は微動だにせぬまま、目の前の水溜りへと片目だけの視線を送っている。頭の中を疑心で一杯にして。

それから一体どれ程の間か、雨水に浸り続け、濡鼠と化したハールの背後より声が掛かった。

「……こんな所に居たのね。」

そつと振り向けば、開かれた傘の下で無然とした表情を浮かべる彼の妻の姿がそこにあった。

「貴方一体どうしたの？ あの花から今日までずっと、何かおかしいわ。」

ハールが握る傘の下で、無手のまま、寄り添う様に歩くイドウナは、少女らしい顔にはおよそ似つかわしく無い表情を浮かべてそう言葉を紡いだ。視線は足元へと向けられ、先よりも荒々しさを増した豪雨に浸って濡れる靴とスカートの裾を見据えている。

「……すまない、イドウナ。」

最早傘の意味が無い程にぐつしよりと衣服を張り付かせているハールは、今歩く大通りの先、ウルトラコンピュータ歯車式超大算譜塔『ユグドラシル恐ろしき神の愛馬』の見果てぬ頂点の方へ視線を向けながら、そう端的に言った。それに対し、きつと唇を噛むイドウナを見る事は、とても出来たものではない。

恐らくもう気付いているだろうが、夫は妻に、自分が今調べている事を告げていない。当然の様に、その兄へも、だ。何時かの台詞、

思考、そして行動を覆す様で心苦しいのだが、ハールはイドウナ達を信じ切る事が出来ないでいた。彼女達が自分に何かを隠している事など、火を見るより明らかだったからだ。他の住人ならば兎も角、塔^{ミダ}の管理者とその娘が、何も知らぬ訳があるまい。ルドールバへも問うた事はあるが、しかし反応はイドウナと一緒にだったのだ。

だがそれが一体何の為で、また誰の為であるかと自問すると、それは間違いなく、ハールの為なのだろう。で、無ければ、とつくの昔に答えを出していたに違いない。そう考えると、自身の行為は著しい裏切りであり、恩を仇で返しているとすら取れるのだが、それでも尚、知りたいと欲する感情はどうしようもない。仮令、それで関係が壊れてしまったとしても構わない、そう思ってしまう程、ハールは疑心と暗鬼に囚われていた。あの夜以来にだ。

ハールとイドウナは、互いに何事かを秘めたまま、黙って道を歩き続けた。外から家までは決して近いもので無く、また雨脚もより酷いものになっていたが、辻馬車に乗る気は更々起きない。イドウナも同じなのか、ハールが風邪に倒れる事を心配はしても、決して辻馬車を呼ぼうとはしなかった。一、二度、辻馬車の方から止まる事もあったが、全て無視した。

外海から農耕地を経て、門扉を潜り、大通りに並立する職人街を抜ける所まで来て、ハールは俯き気味に、ふう、と深い溜息を付く。全く、気にしなければ良いというのに、何故こうまで気になるのか、と。そうして、彼が視線を戻した時、ふと前方に佇む人影に気が付いた。最早滝と言っても過言ではない雨の下の通りに人通りは殆ど無いというのに、それでも尚、留まるあの影は誰だろうか。ハールがそう思い、近付いて行くと、彼はその正体に気が付いた。

「……ロプト。」

「いやいや、遠出をしていた様ですなあ、ハール殿。イドウナ殿が大変心配されておりましたよ。もう、イザヴェル中を探し回っていた様でして、まあともあれ見つかって、」

傘の下で、何時も通りの態度で声を掛けたロプトの言葉は、しか

し最後まで紡がれなかった。突如ハールの側から離れ、駆け出したイドウナの拳が、その横っ面を殴り抜けたからである。スカートなどまるで意に介さぬ軽快な走りの元、勢いはそのまま、高々とした跳躍より放たれたその拳は、ロプトの体をちよつとした池と化した道の上へと吹き飛ばした。そしてその上に馬乗りになると、啞然としているハールの前で、彼女はロプトの襟首を掴み、徐に叫ぶ。それは、陰しい感情と激しい雨音によって乱され、判然としなかったけれど、だがかの青年に対する叱責である事は想像出来た。

そのロプトは、しかし傍目に平然とした表情を浮かべている。頬こそ赤く腫らせているものの、口元に浮かべた笑みはそのままである。それに心かき乱されたのかイドウナが再び叫んだ。

「何の……何のつもりよあんなつ。」

それは何処か獅子の咆哮を思わす台詞であり、我に返って、止めに入ろうとしたハールの脚を、はたと止めさせた。そうして髪や衣服を艶かしくも濡れさせるイドウナの背中へと、ただ視線を送る。彼女は、わなわなと震えて襟首を掴んだまま、ロプトを見下ろしていた。

と、そこで彼は、ついと体を起こした。唇がイドウナの耳元へと寄り、そつと何かを囁く。

その言葉はハールには聞こえなかったが、しかし衝撃的なものだったのだろう。彼女は、ばつと腕を離し、体を遠ざけ、まじまじとロプトを見た。彼は相変わらず、にやにやと嫌な笑いを浮かべていたが、イドウナの方を見つづに、そつと首を縦に振った。彼女はそれで納得したのか、何も言わず立ち上がると、ロプトから離れる。そうして一人何事かを思案し始めるのにどうやって声を掛けたものかとハールが考えていると、その側へと、ロプトがやって来た。

「全く、良い妻を持ったものですな、ハール殿？」

「え……あ、嗚呼、いや。それより、頬は大丈夫か？」

唐突に声を翔られた事で慌てながら、ハールは声を掛ける。ロプトは、大事無いですよ、と頬を擦り擦りにやけた笑いを見せると、

ずっと老人の元へと、イドウナ同様に顔を近づけ、

「何度目ですか？ 貴女が、聞くべき相手と場所を間違えるのは。」

そう囁きつつ、軽い驚きを見せるハールの片手に、何かを握らせた。掌を開いて見ると、表側こそ何も刻まれていなかったが、確かにあの幻画劇場の入場券がそこにあった。ハールが首を傾げ、これは何か、と聞くと、ロプトは意地の悪そうな微笑の元に応える。

「冥府の国への鍵、ですよ。言ったでしょう？ 物事の真偽を見極めなければ、頭を下にして首を括れ、とね。今夜十二時に、フニットビョルグ座で待っています。」

何処かで聞いた言葉に驚愕の表情をして、ハールが問い返そうとした時、ロプトはもう既にその場を離れていた。人差し指を縦に唇へ当てながら、そっと自身の傘を引っ掴むと、青年は道化じみた歩みで、その場を去って行く。漸くに勢いを落とし始めた瀑布の下では、ハールとイドウナのみが残されていた。

それから二人は、多少とも小雨となった天候の中を歩き、家路へと付いた。

その間どちらとも言葉を交わす事は無く、互いに濡れた体を寄せ合わせる事も無い状態で家の扉を開けたのだけれど、直ぐに沸かされた湯の温かさが緊張をある程度解き放ったのだらう。浴室から出る頃には、二人ともに微笑みと落ち着きが戻っていた。

バスローブを羽織、寝具に腰掛けてハールが体を乾かしていると、同じくバスローブ姿のイドウナがたっぷりと珈琲を入れた二つのカップと切り分けられた林檎を盆に載せ、寝室へと入ってくる。そのカップの一つを夫へと渡せば、妻もまた残りを取り、ばふんと隣に座った。

豆や技術から言えばルギエの喫茶店カフェで出されたものの方が上なのだろうけれど、しかし味としては遥かにこちらが良い珈琲を啜りつつ、さてまず始めに何を言ったものかとハールが悩んでいると、そっと背中を預けながらイドウナが言った。僅かに首を傾け、彼を

見つめ、

「その……うん、ごめんなさい、さっきは。でも気にしなくていいんだわ。何かあれば、私を頼ってくればいいんだし……ねえ、貴方は私の夫で、私は貴方の妻、そうでしょう？」

今日この日に至る間、何度言ったか解らぬ言葉を口にする。その変わり映えのしない、だが心地良い台詞に、ハールは、ふっと顔を綻ばせて頷いた。

「嗚呼……全くだイドウナ。私こそ、少々根を詰めすぎていたかもしれない、な。」

その開かれた手が黄金の髪に触れ、優しく撫ぜられれば、イドウナの唇も穏やかに吊り上り、されるに任せる。何故かも知らぬのに、何故かも知かぬのに、身を委ねる彼女へ、かすかに心臓が軋む想いを感じつつも、ハールは小さな両肩を抱いた。

そうしてカップを傍らへ置けば、後はさして語るべくも無い。ただ、光の無い空間で、二人は産まれたままの姿となれば、まだ僅かばかり芯に残った寒さを癒すべく、体を求め合った。

だがしかし、青春の若々しさと、確かな愛の蜜に満ち溢れる^{シルエット}体を味わう一方で、ハールの頭の中では先程出会ったロプトの幻影がちらつき踊っている。

あの男の言動を流す様言ったのは、義兄であり、彼の上官であるルドールバだった。けれども、それからほんの少ししか時が立っていないというのに、流せずにいる自分がいる。実に申し訳無い限りだが、だからと言って容易に忘れられるものではない。

健やかとは言い難い心臓を奮い立たせ、幼き妻を愛し続ける片割れで、ハールはそう考えていた。我ながら、酷い裏切りだと心は痛むけれど、しかしそれでも尚、知りたかった。そもそも何を知ろうと考えているのかすら知らぬ身として、それは切実な問題であった。

そして、高まった情欲が解き放たれ、訪れた睡魔に任せた後に数時間後。

独り静かに寝具から身を起こしたハールは、隣で寝息を発するイ
ドゥナを見つめる。あの天候の中で歩き続け、愛の営みに興じた彼
女はすっかり寝入っており、起きる気配も無い。その安らかな寝顔
を見つめて、ハールは僅かに眉を顰めるも、だがそつと寝具から抜
け出た。

行為の最中に脱いだローブに腕を通しつつ、時計へと目を向けれ
ば、時刻は夜の十時半という所か。着替えて準備をし、辻馬車で向
かうには、丁度良い頃合だと言える。

ハールは暫しそのままに考え込んでいたが、意を決した様に頷く
と、着替えるべく衣装棚へと向かった。新たな衣類を取り出つつ、
彼はローブのポケットより、あの入場券を取り出す。

カーテンの隙間から毀れ入る僅かな月光に照らされ、合成樹脂の
表面は艶々と輝いて見えた。

衣服を整え、ハールは家を出た。大分前に雨は止み、今はただ水
溜りや濡れた窓にその名残が見出せる道を進みつつ、大通りへと出
れば、通り掛かった辻馬車（今度のそれは、名前の通り確かに馬の
形をしていたけれど、何故か八本の脚をしていた）へと乗り込む。

向かう場所は以前と同じだが、しかしその隣には誰も居ない中、
約束の場所であるフニットビョルグ座へと彼は至った。石畳の上に
降り立ち、懷中時計を取り出せば、丁度の時間である。

ハールは半地下となった入り口へ向かうべく、階段を下りた。今
日は営業していないのか、もう既にその時刻では無いのか、扉の前
に給仕は居ない。が、木戸の隙間からは人工的な光が垣間見え、こ
の向こうに何者かが待っている事を如実に表していた。

最後まで下り切ると、ハールは扉の前に止まった。給仕が居ない
以上は自分が開けなければならないのだが、ここに来て、本当に良
いのかと言う迷いが生じる。恐らく、この中に入ってしまったら、も
う元の通りには行かなくなるだろう。今までそれを恐れて深入りし
なかったのだ。その謎が向こうから来た事で、嫌が応も無く動かさ

れる羽目になってしまったけれど、だが、決定的な所で彼は破綻するのを恐れていた。脳裏に、イドウナの姿が現れては消える。

取っ手を握ったままで、ハールは暫し立ち止まっていた。だが、ここに来た以上、もう答えなど決まっている様なものである。彼はふうと一度深い溜息を付いてから、そつと扉を開けた。

「まるで時計仕掛けの林檎の様ですなハール殿。実に正確極まりないご到着に感服致します。」

そう一步を踏み出したハールに向け、あの特徴的な声が降り掛かった。

老人の前、売店のカウンターが上に、ロプトがにやけ面を浮かべて座っていた。片方の手には件の蜂蜜酒が入った容器が、もう片方の手には齧り掛けの林檎が納まっている。

「ロプト……何のつもりか、とは聞かない。そんな事はもうどうでもいい。」

その姿に生理的な嫌悪感を覚えつつ、ハールは歩み寄った。右目だけで睨みながら、懷より入場券を取り出し、突き付ける様に青年へと向ける。

「私が聞きたいのは真実だ。お前がそれを教えてくれる、そうなのだろう？」

「……勿論で御座いますよ、ハール殿。いや、来てくださって、実に良かった。」

そう言って、蜂蜜酒を飲み干し、林檎を咀嚼すると、空いた手でロプトは切符を掴んだ。それ自体に意味は無いのか、彼は胸ポケットへそれを仕舞うと、カウンターから降りて、ホールから伸びる廊下を、つかつかと歩き始める。

「このままではくだらぬ終わりを迎えるかも考えておりましたけれど、もう大丈夫です。さあ行きましよう、時間はまってくれない。

ご案内しますよ、貴方が求めるものがある場所へ。」

そうして進む先にある扉には、大きく『9』の文字が刻まれていた。

ハールが始めて訪れた舞台の構造は、先程のホールと概ね同じものだった。数十人規模の座席が拵鉢上に配置された部屋で、その中央に、黒く太い蒸気送付用のパイプを何本か繋ぎ、八方向から映像を投射する為のレンズを付けた台状の機械が置かれている。本来ならばその台の上に幻画が灯され、観客達の目を愉しませるのだろうが、しかしそのどちらも今宵は無く、灰暗い照明はハールとロボットの影のみを移し、二人の足音だけが周囲へと木霊する。

「もしか気付いておられるかもしれませんが、イザヴェルには数に對す信仰があります。」

中心部へと至る階段を下りながらに、ロボットはそう唇を開いた。

「三と、更に三をかけた数、即ち九に對する信仰です。ここに住む者達は、それを聖なる数と考えており、至る所にそれは散見出来る。意外な所にも、ね。そこまでに、信仰は根強い。」

彼はそのまま言葉を紡ぎつつ、台の際に置かれた制御用らしき算譜機械へと近付く。ハールとしては、この青年が何を言いたいのか、或いは何をしようとしているのか解らないので黙って付いて行くより他ならなかったが。

「だが一つおかしいとは思いませんでしたかな？」

「……何を、だね。」

小さな起動レバーを押し上げてから、打刻鍵盤タイプボードを叩くロボットに、ハールはそう聞き返した。作家である彼をも超える高速で指を動かしながらに、青年は微笑んで言う。

「この都市の区分ですよ。先の例で行けば三か、九でなければならぬのに、区画は八だと言われている。矮人よりも、そうだ、ある種堂々と、それは隠されているのですよ。」

そうして、小気味良い一つの打刻音が響くと同時に、何か重たげなものが動く音が響いた。

「これは……。」

音がした方、ロボットの足元をハールを見ると、そこには先程まで

無かった階段が出来ている。下へ、下へと伸びるそれは深い闇を称え、何処まで続いているのかすら解らなかった。

それをじっと見据える彼に、道先案内人は打刻鍵盤から指を離して微笑む。

「イザヴェル九番目の区画、冥府の国で御座います。さ、参りましょう参りましょう。」

そこはロプトが言う様に、本当に冥府の国へと至る道では無いのだろうけれど、しかしそう思わせるだけの陰険な雰囲気を漂わすだけの何かがある道程だった。天井と床に一本ずつ、発光塗料による線が引かれている以外は全くの闇が覆っているにも拘らず、まるで見えているかの様に暗闇の中を螺旋状へ降りて行く青年を頼りに、ハールは覚束無い足取りで進んで行く。多少とも目が慣れ始めているとは言え、それでも完全とは言いが難かった。

「……何処まで行くつもりなのかね？」

その暗さへ、にわかに不安が起き上がり、彼が先へ行くロプトへ問うても、

「何、直ぐですよ。直ぐに、全部が解ります。」

ただそう返すだけだ。ハールは、さてこの言葉を信じたものかと、溜息を付いた。ここが何処かは知らないが、単純にからかわれているだけなのでは、とすら思えてくる。しかし、微かに見え始めた光と、聞き覚え音と震動が、確かに真相に近付いている事を告げた。

気が付けば階段は回廊となり、やがて抜け出たその先の光景に、ハールは度肝を抜かれた。

硝子一枚、と言っても、相当の分厚さを誇るものを通して、彼の前に広がるのは、大小様々な歯車の群れであった。小さなものではハールの小指の先程、大きなものでは数階相当の建物の歯車が、縦と横と言わず、およそ三次元で捉えられる方を向いて、駆動軸を元に回転しており、それが二人の人間が立つ鉄製の床を揺さぶっていた。

「これが塔の基礎機構です。いや、本体と言うべきか。算譜機械としての機能は、全てこの地下に集約されている。上は、事務所だとか出力機だとかいう表面的なものに過ぎんですよ。」

啞然とした様子で、互いに歯を絡めながらに回り続ける機械要素の塊を見つめるハールに、ロプトは幾分か誇らしげに微笑みながら説明した。更にその紅い瞳を細め、

「最初に秘譜^{ルイン}を創造した人間は、延々と行われるこの歯車の動きをずっと見ていたと伝えられておりますが、さて……今の貴方には、何時まで見ていても解るものでは無いでしょう。先を急ぎますよ。次の場所へは道が複雑になる、ちゃんと付いてきてください。」

ハールはその言葉の中に、何か違和感を覚えたけれど、だが何も言わずに、甲高い靴音を鳴らして奥へと向かうロプトの背中を追って、先へと進んでいった。

照明に満ちていたそこから、再びあの薄暗い通路に踏み出すと、成る程、確かに進む道程はずっと複雑なものに変わった。前に言っでは直ぐに右へと曲がり、そう思えば左へと折れる、と言った按配を繰り返して、ハールはロプトを追い従うのに精一杯だった。

また今回は先程よりも長かった。時計を見る事が出来なかったから具体的な数値は解らなかったけれど、少なくとも数十分、下手をすれば一時間はその光乏しい回廊を彷徨っていたと思う。もしかしたら感覚がずれているだけで、実際はもっと短い間だったかもしれないが。

そうやってハールがうんざりする程歩き続けた後、ロプトは止まった。

「さて、目的地の一つに到着した訳ですが……心の準備は本当に宜しいですか？」

すつくと体をずらすと、彼の前には鉄製の扉がある。劇場へ来た時の様に、隙間から光は毀れていないが、中から聞こえる物音と話し声から、誰かが居るだろうとハールは察した。その、闇の中で尚

黒い扉を見つめながらに、彼はごくりと一度生唾を飲んだ。一瞬ハールの決心は揺らぎ、或いは引き返すという選択肢が出るも、それに猛然と頭を振って、

「……勿論、だ。さあ、そこを開けて見せて貰おう、か。真実、とやらを。」

「素晴らしい。望む者ならば、^{オースキ}そうで無くては。」

ロプトは、そんなハールの様子ににいつと笑うと、勢い良く扉を開ける。

その先で見たものは、あの塔の機関部よりも巨大な衝撃をハールへと与えた。

「……何だこれは。」

喉の奥から搾り出す様にそう声を出すので精一杯であり、他の一切の行動は封じられた。彼は僅かの間だが、呼吸する事すら忘れて、ただ片目に入り込む映像を理解しようとした。彼の直ぐ脇に佇むロプトは、片側の唇を嘲笑う様に吊り上げ、もう片側を一文字に延ばしている。

「冥府、と言ったでしょう。正にこれがそうだ。この都市に、墓所が無い事は、お気づきになれませんでしたかな？ いや同時に誕生の場所でもあるから、子宮とも言うべきか。まあ、意味合いは一緒でしょうよ。造る彼等にも、造られる彼等にも。」

扉の先、異様な熱気と共に飛び込んで来たその光景は、一言で例えると工房であった。

予想よりも遥かに広々とした広場であり、僅かな照明の下、ずらりと縦に作業机が並んでいる。そうして、一心不乱に働いているのは、あの矮人達だ。彼等は、地上に居る時となんら変わらぬ格好で、だが思いも寄らぬ速度で、てきぱきと手を動かしている。

そしてその台の上に置かれ、金属細工の両手で形作られているのは、人の顔であり、腕であり、脚であり、胴であり、眼であり、鼻であり、耳であった。それらは一目で解る生々しさを誇っており、部品として単体で作られては、台と台を行き交う矮人達によって集

められ、そうして奥の場にて歯車式の脳と金属の内蔵を入れて、組み上げられていく。遠目には何を行っているのか良く解らない作業の後、肌色の着色が行われれば、最早市民達と、いやハールと寸分違わぬ一人の人間の姿がそこにあり、彼等は矮人に運ばれ、別室へと消えて行く。

気が付くと、老人は胃袋に入っていたものをその場へ吐き出していた。珈琲と林檎の混濁物が、鉄の床に当たって水音を立ち上げる。中身の方が空っぽになっても、痙攣は止まらず、ロプトが体を支えようとするのも押しのけながら、ハールは胃液を口から零し続けた。出すものを出してから更に出そうと奮闘してから暫くして、漸く落ち着きを取り戻した彼は、手で口元を拭いつつに、顔を上げた。その生身の眼はじっと、彼等の存在をまるで無視して作業に、人形製造に没頭している矮人達の群れを捉えている。

「……これが彼等の役割、なのか。」

そうロプトに聞くと、青年は、はい、と頷いた。

「この人が入り込める塔の最下層にて、市民達を造る事。寿命を迎えた者達の部品を材料に、一から組み立て直す。他にも行うべき事はありますがね、それが矮人の仕事でさ。」

「……では都市の者達は、皆？」

その質問に対しても、青年は、いや、青年の姿をした人形は鷹揚に頷いて見せた。

「ええ、皆が、です。何人かの例外を抜かせば、ね。例えば貴方の様な。」

「……成る程、な。」

強い眩暈に襲われ、そっと瞳を手で覆いながら、ハールは上を向いて言う。

彼の脳裏に過ぎるのは、都市と、そこに住む者達の姿だ。一見すれば何の問題も無く唯の人間に見える彼等も、薄皮一枚剥がせば機械仕掛けの生物に他ならない。あの矮人や辻馬車を運ぶ者達と同一の存在という訳だ。そしてその矮人の手により、人々は産まれる。

成る程、余り触れたがらぬ訳だ。更にその事實はきつと同じなのだろう、彼女であつても――

「私は……騙されていた。そういう事になるのか？」

「さて、どうでしょう。まだ、見せなければならぬものは御座いますから。」

ハールの質問に、ロプトはそう応えると、くるりと背を向けて、歩き始めた。老人は、その後ろ姿をじっと見つめる。人形だと知つても、やはりその姿は人間にしか見えない。

彼との距離が大分離れた頃、ハールはぶんぶんと首を横に振って、我を取り戻した。

そうだ、これで目覚めと共に感じる感覚が一つの正体は解つた。あの男の言葉を信じて、廻りに真つ当な人間が居ないというなら、成る程、確かに孤独である。

だが、もう片方については、聊かこれだけでは収まりが悪い。それにロプトは『目的地の一つ』とここを指した。ならばもう一つの方が別にあるのだろう。

この都市に置ける唯一の例外、ハールという人間は何者であるのか。或いは本当に？

全てを決めるのは、その答えが解つてからでも遅くはあるまい。

ハールは再びロプトの後を追いつ始めたが、今度のそれは実に短い間隔しかなかった。

それは、九ヶ月以上もの間悩み続けた疑問が解かれ始めた興奮が、そこから生じた混乱が、彼の中で渦巻き、精神を昂らせていたからに他なるまい。物分り良く、頭で理解した気になつていても、まだ心の動揺は深いままであつた。

「はい到着で御座いますよ、と……おやおや。」

だからこそ、最後の目的地についても彼には動揺も何も無い。その場所は、先程の工房よりも遙かに広大な場所であり、より明るい照明が吊るされていた。どうやら地下の中でも塔の直下、中心部に

あるらしく、中央には柱状の昇降機エレベーターが建てられている。そこへ行くまでの間は何処までも深い闇が続く奈落であり、ハール達が入った所から一本の鉄橋が真っ直ぐ伸びていた。他にも入り口はあるらしく、四方にも同様のものが見受けられる。

「誰かが入り込んだと思えば、成る程、お前だったかロプト。」

「義兄さん……。」

そしてその感覚は、昇降機が扉の前に立つルドールバへも同じだった。圧縮した蒸気を詰める金属管を備えた旋条銃ライフルを構える矮人を二人連れて、彼は整った顔を陰しく顰めながらに己の部下を睨んだ後、ハールの方へとその視線を向けて言った。

「お前達、ここが何所なのか知っているのか？ いや、ロプト、お前ならば知っているだろう。」

ロプトはその言葉に、にしゃりと口元を歪めて応える。

「勿論ですよ、当然でしょう。そこは、イザヴェルでただ一つ、地上へと行く為の門扉だ。」

彼の言葉に、ハールははっとして、彼方の天井まで突き立てられた昇降機を見据えた。見えなくなって尚も続いているのだろうかそこは、彼が始めて来た場所まで繋がっているという。

「ならば話は簡単だ。塔の管理者としてここは通せない。お引取り願おうか。」

「……断る、と、申したならば、如何されるおつもりかな？ 義兄さん。」

そうして発せられた命に、しかし老人は従う事無く、鉄橋へと一歩を踏み出した。一斉の二つの銃口が突き付けられるが、ハールは一筋の汗を流すばかりで、下がるうとはしない。

ルドールバは、微笑を浮かべて傍観を決め始めたロプトへと一瞬視線を送った後、両手で銃身を押さえながらに、良いのか、と聞き返した。

「これは、ハール、お前を思ってた事だ。言っただろう？ その男の言葉に従うな、と。ならばこそ、この私の、お前の愛する妻が兄の

言葉を聞き入れ、早急に、」

そこで、ルドールバを見据えて歩むハールが唇を開いた。

「それが人形であっても、ですか義兄さん。」

途端に美しい青年の顔が歪む。つまりは、正解という事なのだろう。彼自身、人形なのだ。ただその様子は明らかに人間のそれであり、言った当人も胸が軋むのを感じる。それでもここで引き下がる訳には行かない。もしそうしてしまえば何の為にここまで来たのか解らないし、また何よりも真実、それこそが重要であった。

「私を助けてくれた事には感謝します……イドウナとの件についても……だが、それでも、私は知りたくてならないのです。義兄さん、ここは、どうか。」

「……ハール……。」

ルドールバはじつと、靴音を立てて近付き来る義弟を見つめていた。二つと一つの視線が重なり、そうして彼は、ハールの意思を読み取ったのか、首を横に振るって、

「……いいだろう、好きにするがいい。」

矮人達ともども、そつとその身を引かせた。ハールは、感謝の意を示す為に頭を下げてそこを通り過ぎると、昇降機の門扉が前へと立つ。矮人の一人が、その傍らに置かれた打刻鍵盤で操作している間、彼は分厚い木で出来たその形状が、算譜機械起動時に表示される『二十世紀ドアーズ』とそっくり同じである事に気が付いた。

暫くすると、聞き覚えのある荘厳な鐘の音色が響き渡り、内側へその扉が開き、小さな箱部屋が露になる。

ハールはそれをじつと見据えた後、何度目かの溜息を付いた。瞳を瞑り、心音が多少とも落ち着くまで待ってから、意を決して中へと入る。瞬間、再び操作された扉が閉じて行く。外を見れば、ぐつと顔を強張らせているルドールバと、相変わらぬ笑み浮かべる口ブトの姿が見えた。それも直ぐに閉ざされて見えなくなり、やがて一度揺れてから、奇妙に滑らかな浮遊感を伴って、昇降機が動き始めた。

独りになってから、疲労感が押し寄せ、老人はふらふらとその背を壁に傾ける。真実を求める心を上回って、これで良かったのかという後悔が鎌首を上げる。だが、ここまで来て一体今更それが何になるというのだろう。ぶんぶん頭を揺すり、ハールはそれを有耶無耶にした。

ふと気付くと、扉の横に幾つかの操作器具と共に『0』と浮かんだ表示装置モニタが付いている。何時まで待ってもそれは一向に変わる事無く、飽きる程の時間が経過した後に漸く『1』へと変化した。徐々に地上へと続いているのだろう、とハールは考えていたが、しかしなかなか変わらない表示装置を見据えている間に、彼の意識は我知らぬ間に遮断された。シャットダウン

「……茶番、だな。」

そして残されたルドールバは、独り言の様に円柱を見据えてそう呟く。矮人達は意識というものが無いのか、それに反応する事も無かったが、ロプトはにやつと笑ってこう問うた。

「おやおやおやおや、代理機械デウスエクスマキナたる神の貴方がそれを仰られますかな？」

その皮肉げな様子に、ルドールバも自嘲する様に鼻で笑ってから返す。

「それを言うならお前だろう、滑稽デウスエクスマキナなる舞台装置。小賢しく動いているのは其方では無いか。」

更に彼は何処か遠くを見つめる様に視線を上げ、

「矮人どもを地上へと解放し、彼方此方に予言めいた言動を残す。あえて疑惑を撒き散らす事に一体何の意味があるんだ。それも、こんな、何度も何度も何度も……。」

「しかし残念ながら、それが私の役割でしてね、はい、仕方が無いと思って貰うしか。」

己の上司が様子に、ロプトは肩を竦めて言った。ルドールバも、解っている、と口にはしたが、しかし実際にはそんな事は無いとい

う表情を浮かべて応える。

「だがそれでも不憫でならないのだ。あの娘を見ていると、な。」

「イドウナ殿の事ですか。確かに、それはありますな。少々、ですが。」

それは酷く哀しげなものがあり、ロボットも流石に真顔になった。だが直ぐに歪めて、

「昼間、とうとうぶん殴られましたね。ずっと我慢してた鬱憤ですしょうか？ 痛い何のありやしませんでしたよ。今回が何度目かを告げたら、大人しくなりましたが、ね。」

道化じみた動作で頬を摩るロボットに、ルドールバも苦笑いし、そして頷く。

「嗚呼そうだ、その通り……確かに、約束ならば、今回がその時だ。」

ルドールバが天井へと向けた視線を追い掛け、ロボットもまた首を上げる。

「そう、これで彼も彼女も悩まなくて良くなる訳だ。何せ今回で、」

そして胎児の如く眠る老人の前で表示装置が『9』を刻み、昇降機が音を立てて止まった。

4. 旧き時代への浪漫人

骨まで染み込む様な肌寒さに身震いし、ハールははっと体を起こした。どうやら眠ってしまっていたらしい。意識の霞具合から言って結構な時間そうしていた様だ。彼は額を押さえて頭を振り、感覚をはっきりさせると、ゆっくりと立ち上がった。

表示装置モニタに『9』と刻んだ昇降機エレベータは既に停止しており、開かれた扉の向こうに薄汚れた廊下が見えた。何処かあの地下の回廊を思わすそこは、同じ様に発光塗料による照明が天井と床に付けられており、見えない奥まで延々と続いている。どうも地上に付いたという感覚はしないのだが、出てはいるのだろう。ハールは、骨身まで染み込み来る寒さに身を縮ませつつも、ゆっくりとした足取りで壁を伝いに歩き始めた。同じとは言え、先程とは違い、前にはロプトが居ないから慎重に進んでいるのだけれど、幸いな事に途中で曲がったり、横道があるという事は無い様だ。視界の上下に移り込む線を頼りに、ハールは進んで行く。

そのまま暫く歩き続けると、線は途切れ、鋼鉄の扉が前に立った。横へ引っ張り開けるものの様で、老人はその取っ手を掴むと、力を込めて、扉を横へと滑らせる。

思いの外力を要せず、開かれた扉の向こうには、一面の黒世界が広がっていた。

「……ここは……。」

啞然とした様子で、ハールは歩く。どうやら今だ建物の中の様で、石畳で築かれた床を進むと、『ユグドラシル恐ろしき神の愛馬』の基礎構造を覆っていたのと同じ壁に手を付き、外を見た。

何時か夢で見た時と同じ光景。それが硝子一枚を通して広がっている。濃厚極まりない灰褐色の雲が天を覆い尽くし、そこから降り注ぐ黒い雪が、大地を黒一色に変えているのだ。ただ違うのは、地平線の彼方に建築物が見える事だ。明らかに倒壊しており、瓦礫の

山と言った方が適切に思えるが、だが確かにその様な、人が居たという証が無数に存在している。肝心の主の姿は彼方にも此方にも、その他の動植物と合わせて影も形も無かったが。

「私達は、ヴァルハラ、と呼んでいるわね。世界のその後、死んでいった戦士達の住処。」

その時背後から聞き覚えのある声がして、ハールは直ぐ様に振り向いた。

入って来た扉の直ぐ横の壁に、イドウナが佇んでいた。感情が無いかの様な、今まで見た事が無い真に人形めいた表情で、聊か大きな過ぎる籠を両手に持って。

「……イドウナ……どうして、ここに？」

ハールはそう聞いて、自身の声色に余り驚きの感情が籠っていない事に気付く。イドウナは、彼も自分も嘲笑う様に唇を吊り上げ、目線を下へと降ろし、

「どうして、って？ 貴方の妻だからよ……何度言ったのかしらね、この台詞。」

そうして、かっかつと靴音を鳴らしてその夫の元へと歩み寄ると、籠の中を漁り、林檎を二つ取り出した。籠を置き、空いた手で片方を掴むと、もう片方をハールへと差し出す。

「食べる？ ここまで来るのに時間掛かったからお腹空いてるんじゃない？」

これも何度目だか、と続けるイドウナを彼は訝しそうに見据えていたが、だが事実その通りであり、素直に受け取ると、がっとなに歯を立てた。良く熟れたそれは、果汁を滴らせ、老人の口に始めてものを食べた様な甘い感覚を与える。

「美味しい？」

「……美味しい、よ。」

同じ様にしゃりしゃりとやり始めたイドウナがその場に座りつつ問うのに応えると、ハールもまた彼女に合わせて、そっとその場に座った。その生身の瞳で、外を見据えて彼は聞く。

「……イドウナ。ここは地上なのか？ だったら……何故こうなった。ヴァルハラ、とは何だ。」

彼女は無表情に租借していたけれど、問われるとじっと外を見据えて返す。そうして、何時にも増して饒舌に、事の真相を口にし始めた。

「さあ？ 余り資料が残っていないから詳しくは知らないけれど、でも戦争があった。何か人では無い者との……火星人や天の遣いと呼ぶ人も居たみたいだけど、ま、要するに敵との、だわ。結果は見ての通りだけだね。この黒い雪は、最後まで戦った人達が起こしたもののらしいわ。自爆覚悟で、それでどうにか敵は追い払ったらしいけれど、地上はこの有様。全く、敵を倒したって自分達が死んでちゃ、守るべきものが無くなっちゃ、意味無いのに、ね。」

今だ覚め止まぬ眠気を抑える様に、ハールはぎゅっと眼を細めて、黒雪に覆われた地平と、地平線の上に立つ廃墟を見た。彼の中で幾つかの謎は氷解しようとしていたけれど、この天候が変化を迎える事は無い。恐らくは今までも、そしてきつとこれからも変わらないだろう。

「それが『フィンブルヴェト剣と狼の大寒波』か……。」

「ええ、そう……その後で、多くの人々は旅立っていったわ。何処へ？ 冥界やら星海へ、ね。少なくともここでは無い何処かよ……でも、それを良しとしない者達が居たわ。」

イドウナは、喉を潤すべく瑞々しい果肉を口に含むと、舌で唇をさつと拭って、

「彼等がかつての世界を取り戻そうとしたの。敗色が濃厚になった頃から動き出していたんだけどね、本格的に行われたのは戦が終わった後。もうどうしようも出来ない位荒んだ地上を捨て、地下に一つの完璧な世界を造り出し、人々の代わりとして自分達の命令を聞いてくれる人形達を産んで、そしてそこで暮らし始めた。自ら記憶と記録を捨て去り、新しい人間として、在りし日に確かにあった平穏を謳歌出来る都市で。種としての繁栄は無く、何時か必ず滅び去

る運命だとしても、一人の人間としての幸福を選んだの。」

「……私もまたその一人、という訳だ。」

都市で出逢って来た全ての人々、塔の地下で見た製作途中の人形を思い出し、半ば落ちそうになる瞼を堪えながら、ハールはふっと苦笑した。失ったものを求めてここまで来たというのに、それは自ら手放したものであったとは。

「そうよ。でも来るのも仕方が無いわ、忘却は完全じゃないのだから。」

「……また、どうしてだね。」

イドウナの言葉に、自らもシャリリとやりながらハールが聞くと、彼女もまた苦笑して、

「負い目、なのかしらね。これで良いのか、という。断片的に幾らか残しておけば、人は釣られてそれを知ろうと欲するものよ今の貴方みたく。ロプトみたいのに、そういうのを積極的に促す者も居るからね、嫌が応も無く知らされる羽目になるわ……そうして真実を知った時、改めて自分は、今の自分では無いその自分は、何を考えるのか？ その答えは一緒かも知れ無いし、もしかしたら別のものかもしれない。イザヴェルで無く、外の世界を望むかもしれない。そうやって、去って行った者が何人も居たわ。彼等がどうなったかは知らないけれどね。」

その者達の事を思っているのか、彼女は若草色の瞳を黒い屋へ向け、哀しげに細める。その人ならざる瞳に宿った光は、とても十代の少女のそれでは無かった。

「ただ、同じ選択をする人も居るわ。そう言う場合は、やっぱりほんの少しだけ、欠片めいたものを残して忘れて貰うの。これも負い目、忘れ去ったままならば幸せだったかもしれない自分への、でも次の次は、次の次の次は、違うかもしれないから、という、ね……そうやって、何度も何度も戻っている人が隣に今、居るわよ。」

「わ……私、かね。」

彼女の視線を肌を感じ、顔を向けたハールは、どきりと心臓を高

鳴らせる。その変化が表情に出たのだろう、くつくつと息を引いてイドウナは笑った。

「うん……もう貴方、一体何度目だと思っているの？ 今生き残っている数少ない人間の中では、貴方が一番長いわ。これで九回目、だもの。貴方は、忘れては思い出そうとし、知っては忘れ、新しい貴方になる。何十年もそうやって来た。色々な貴方が居たわ。」

そのハールであり、ハールで無き者達の事を思い出す様に目線を退けると、彼女は語り出す。

「前の名前はガングレリ、結構な読書家だったわ。その前がハールバルズ。何時も髭の手入れを欠かさないお洒落な人だった。サンゲタルは目覚めて真実^{まじつ}まで早々と来た最短記録保持者。イヤールクは逆だったわね。一番長い間、私と付き従った。俳優になって、演劇の道に傾倒したわ。若くて野心に溢れて、でも老いて行く中、何時までも変わらない私に嫉妬し始め、」

「解った……解ったイドウナ。もう充分理解した。」

人間の脳、記憶とは実に現金極まりない算譜機械^{コンピュータ}の様なものだ。動力たる蒸気が送られる様に、或いは文字を打刻^{タイフ}する様に一つ知識が与えられると、次々に新しい反応が出て来る。自分であった者の名前が語られる度に、ハールはおぼろげながらにその頃の記憶を思い出した。同時に、自身が繰り返して来た行為、更に、彼女にして来た事をも出て来て、彼は慌てて引き止めさせる。その慌てっぷりに、イドウナは漸く少女らしい顔付きで、声を上げて笑った。

「それももう九度目になるわね。 一番最初……まだ貴方が私とそう変わらない年で、万神^{オーディン}と、大袈裟な名前と、皮肉っぽく片目をウインクして名乗った頃も、真実を知った貴方は、そうやってわたわたと逃げたものよ、懐かしいわ。」

それに対し、ハールは唇を閉ざすより他無かった。そうだ、思い出した。ずっと前からイドウナは自分の側に居て、恋人であり、妻であったのだ。ならば、その相手が自分を蔑ろにし、そうして忘れて行くというのは、どの様な気持ちなのだろう。ハールは考えるだ

けで、寒さが体以上に心を冷やし、申し訳の無い気持ちで胸を一杯になった。

「まあでも、これでおしまいなんだけど、ね。」

その時間こえてきた言葉に、ハールはきよとした表情でイドウナを見ようとした。だが、視線を向けるより早く体から力が抜け、彼は情けなくも床に倒れ込んでしまった。齧り掛けの林檎が手より離れ、ころころと転がって硝子へとぶつかる。イドウナはその彼を抱える様にして己の膝に乗せすと、形容し難い笑みを浮かべながらに唇を動かした。

「葉を漏らせて貰ったわ、あの林檎の中に。」

徐々に痙攣し始め、動く事もままならぬ状態の中、ハールは視線を落ちた林檎へと向け、先程から感じていた倦怠感の正体に気が付いた。それから、力を振り絞って片目を動かすと、イドウナの方を見据え、どうにかこうにかして、何故、言葉を紡ぐ。と、小さくも柔らかい手で穏やかに髪や頬を撫でて、彼女は応えた。

「負い目の後の諦めよ。忘却と再録の繰り返しも、九度目で終わりという事になっているわ。それ以上繰り返し返した所で答えは変わらないという事。そこから先は、完全に都市の市民として暮して貰う事になる。でも、動けなくさせたのは私の勝手。」

更にイドウナは、ぎゅうとハールの頭を抱え込みつつ顔を降ろした。唇同士が殆ど触れ合うか否かの距離まで近付くと、彼女は笑みを殺し、ぎゅうと唇を噛んだ。

「もう私は耐え切れないのよ。貴方、ねえ、貴方なら解ってくれるわよね？ 私がどれだけ貴方を愛しているか。ずっとずっと一緒になりたくて、でも出来なくて、どんな想いをしてきたか、きっと貴方なら解ってくれる筈よ……今更、去ろうだなんて、許さないわよ？ 最後の選択が何であれ、貴方は私と一緒にイザヴェルへ帰って貰うんだから。」

見開かれた瞳から、涙がはらりはらりと零れ落ち、ハールの頬にぱたぱたと落ち始めた。その様子は、義兄やその部下、いや、都市

の者達を思い返した時と同じく、人形にはとても見えない。余程精巧に作られているという事であり、ある種の欺瞞であるのは間違いないのだけれど、だが全てを知った今、追い求めていた真実とは何なのかを知った今、それは必ずしも不快なものでは無かった。寧ろ、好ましいとすら感じられる。

「イドウナ……いや、答えは変わらないさ。」

徐々にだが確実に意識薄れ、体の力を衰えさせて行く感覚に抗い、ハールは片手を伸ばした。その指が彼女の頬に触れ、そっと雫を拭いて去って行く。信じ、疑い、また信ずる。何とも都合の良い話ではあるけれど、しかしそもそも最初に自分がこの都市へと来たのだから……その時の想いは、とっくの昔に忘れ去っているけれど……つまりはそういう事では無かったか。

「これまで、すまなかつた、本当に……だがもういいんだ。イザヴェルへ帰ろうイドウナ。」

イドウナは撫ぜられるがままになっていたが、その言葉を聞くと、嗚呼、と涙は残したままに笑みを浮かべる。彼女の両腕に力が籠り、ハールの顔はその胸の内に抱かれた。心地良い人肌の温度がこの寒々しい場所にあつて伝わり、ハールを安堵させる。

「ええ解ったハール、ありがとう……大丈夫、何も心配要らないんだから。」

イドウナは、体を離すと、にこやかな調子で籠から真鍮製の兜の様なものを取り出した。妙に大きく無骨なそれが、記憶を消去する為の装置なのだろう。

それがゆつくりとハールの頭に乗せられ、視界が暗闇に収められるのとはぼ時を同じくして、老人は遂にその心身を完全に眠りの中へと陥らせた。

そこではまず無音の闇が満ちていた。何も見えず、何も聞こえない、暗き場だ。

彼は、自分が形も無く、蒸気のように漂う不形の者になった心持が

した。魂というものを現世に抽出したならばこの様なものでは無いか、と思わせる不確かな存在だ。

彼はその闇の中でもがき苦しんだ。無い腕を動かし、無い脚をばたつかせる。

肉が欲しかったのだ。肉体が、確かな存在が。

無限に等しい己、或いは己に等しい無限など、彼には耐え切れなかった。そんなもの、死んでいるのと一体何が違うというのだろう。そうだ、今の彼は死者そのものと言っていい。

だが望みが叶った。彼は、己という枠を手に入れた。空間の中で独りっきりであつたが、しかし彼は闇から抜け出した。最早無限は彼で無く、彼は無限で無くなった。

更に光が生まれ、大地が、大気が現れ、天地の狭間に彼は投げ出された。それもまた確かとは言い難いものではあるけれど、だが上下の概念が誕生したのは良い傾向だった。

天と地が離れた次の瞬間、彼はぐっと落下し始めた。当然だ、人は空を飛ぶ生き物で無く、地面を歩く生き物である。狭間などという中途半端な場所など、論外だ。

堕ちて行く感覚は彼を安堵させ、やがて煙たげな雲を抜けて視界へと映る地上の町並みに、下へと向かう自分とは反対に、上へと伸び行く塔の姿に、彼は安心を覚えた。

帰って来たのだ、という強い想いが、もう行かなくともいい、という別の思いと共に生まれ、その二つは、彼と彼女の家が目前へと迫る頃に極限へと昂り――

最初に得たのは、兎にも角にも素晴らしき多幸感であつた。

人の手によって築かれた太陽が都市イザヴェルへと光を運び込み、新たな一日がどの様なものになるのかという期待で胸が溢れる。開け放たれた朝日にそう心を震わされ、一人寝具の上で目覚めたりーヴは笑みを浮かべながらに大きく伸びをすると、そっとシーツから抜け出た。

寝間着姿のまま、年甲斐も無くはきはきとした様子の中、階下へと降りる。居間へと行けば、愛しの妻イドウナが既に起きていて、目覚めの珈琲を入れておいてくれた。

豊かな黒色を称えるそれが並々と注がれている愛用のカップと共に、都市唯一の新聞『詩篇』^{エッセ}を手に取り、椅子に座りながらにまずは一杯。苦く旨いというある種矛盾した味わいを何時も通りに与えてくれる魅惑の飲み物を啜りつつ、事件というよりも街角の噂話程度の事しか書かれていない紙面に微笑む。退屈と言う事なかれ、それはつまりここが平和である何よりの証拠なのだから。ただ、何と言ったか、リーヴと同じ、片目の作者が書いていた連載小説が、結局の所未完のまま終わってしまったのだけが、心残りと言え、心残りではある。

付け合せとして出された切り身の林檎と共にカップの中身を空にする、言葉と共に行動によって、感謝の意をイドウナへと示す。若く、美しき我が妻は、はにかみながらも確かに応え、ちゃんと返してくれた。良い限りだ。全く持って、良い限りである。

それから寝室へと戻ると、ちゃんとした服に着替え、同じくイドウナが寝間着からドレスに着替えるのを待つ。リーヴはこれから、その日課である散歩へ行こうとしていた。今日は平日であるけれど、既に老年を迎えている彼は、都市から生活の為の費用を頂いている。且つ、イドウナの兄であるルドールバが都市管理の頂点ならば、二人で日々を過ごす程度、どうとでもなるというものである。

そうして外へ出ると、窓から入り込んできたのと同じ、心地良い朝の光が町並みと、彼方に見える歯車式超大算譜塔『満たされし神の愛馬』^{ウルトラコンピュータ}を美しく照らし出している。更に幸いな事に、雲の出も大丈夫の様だ。この都市を動かす為に必要不可欠な動力源である蒸気は、リーヴの体には決して良い影響を与えるものでは無い為、無ければ無いに越した事は無いのだ。

リーヴは、その片腕をイドウナへと明け渡すと、家のある小路からとりあえず大通り目指して歩き始めた。遠出するのならばそこで

あの奇妙でおかしな形をした機械仕掛けの動物達が引く辻馬車に乗るのだけれど、そこら辺りを散歩するだけなのだから、わざわざ乗る事もあるまい。早くに付く事は確かに便利だが、その分、二人だけで歩くこの時間を潰されては堪らない。尤も、二人だけの時間なと持とうと思えば幾らでも持つ事が出来るんだか。

と、歩いていると、目の前で見知った顔が居た。確か、義兄の部下で、ロプトという男だ。彼はこの都市を支える役目を持つ矮人を従えて、若い男と何か話しており、荒々しく叫ぶ彼に対して、礼儀正しく応えている。ふと視線が合ったので、リーヴは会釈し、その場を後にした。イドウナの顔が一瞬だけ険しくなった気がしたけれど、彼はそちらには気付かない。老人の視線は寧ろ青年の方に向けられていたからだ。

彼は一体何をあんなに忙しく叫んでいるのだろうか、とリーヴは思った。立ち止まって聞き入る様な、そんな無作法はしたくなかったから、会話の内容は解らなかったけれど、彼の顔は鬼気迫る様な装いがあった。まるで、何かに追われているかの様に。

老境へと至っているが為だろう、リーヴにはその気持ちは解らなかった。彼が必死になるその感情が、理解出来なかった。何故といって、そんな事をしなくとも、世界には希望と幸福が満ち溢れているのだから。そして勿論、この隣にも。

ただ、それを味わえるのももう余り長くは無い事は自覚している。自分の正確な年齢など、とつくの昔に忘れてしまっているけれど、何時迎えが来てもおかしくはあるまい。

だが、死ぬ事に対する恐怖なんかは微塵も感じてはいなかった。もとい、今ここに確かで暖かい感触があるならば、恐れるものなど何も無いとすら思っている。強いて言えば、そのイドウナが独り残される事が心残りなのだが、彼女には自分の死後、好きに生きる様に言ってはある。妻は、貴方が死ねば私も死ぬ、などと応えたが、よもやそんな事はしまいだらう。

ともあれリーヴは、満ち足りた想いとそこから来る羨ましがるべ

き悩みを胸に、ロプト達から離れ、散歩を再開した。目的地こそ決まっていなかったけれども、だがその様な事一向に構うものでも無からう。彼等が行く所こそが道となり、目指す場所なのだから。そうして視線を向けるとそれに気付いた少女は、顔一面に笑みを浮かべて応える。彼女の夫もその微笑に微笑みで返し、腕に力を込めると、二人は連れ立って何処へと歩みを刻んで行くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9925e/>

オールドロマンサー Old Romancer

2010年10月8日15時37分発行